平成30年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集

平成30年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集

目　次

１．実践事例集について …… 1

２．実践事例

スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び

佐野市立田沼西中学校（栃木県） …… 3
清須市立清洲東小学校（愛知県） …… 5
沼津市立第二中学校（静岡県） …… 7
香川県立坂出高等学校（香川県） …… 9
福岡県立久留米聴覚特別支援学校（福岡県） …… 11
札幌市立北園小学校（札幌市） …… 13
京都市立東山泉小中学校（京都市） …… 15
大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校（大阪市） …… 17

マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成

下妻市立大宝小学校（茨城県） …… 19
京都府立鴨沂高等学校（京都府） …… 21
福山市立加茂小学校（広島県） …… 25

スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築

宮城県南郷高等学校（宮城県） …… 27
宮城県利府高等学校（宮城県） …… 29
佐倉市立根郷中学校（千葉県） …… 33
八百津町立八百津中学校（岐阜県） …… 35
伊豆の国市立大仁小学校（静岡県） …… 37
滋賀県立長浜養護学校（滋賀県） …… 39
篠山市立城東小学校（兵庫県） …… 41
今治市立北郷中学校（愛媛県） …… 43
宿毛市立山奈小学校（高知県） …… 45
宿毛市立宿毛中学校（高知県） …… 47
長崎市立香焼小学校（長崎県） …… 49
熊本県立鹿本高等学校（熊本県） …… 51

静岡市立梅ケ島小中学校（静岡市） …… 53
北九州市立曽根中学校（北九州市） …… 55

日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

登別市立幌別中学校（北海道） …… 57
郡山市立白岩小学校（福島県） …… 59
境町立長田小学校（茨城県） …… 61
埼玉県立上尾高等学校（埼玉県） …… 65
千葉県立矢切特別支援学校（千葉県） …… 67
石川県立鶴来高等学校（石川県） …… 69
郡上市立明宝小学校（岐阜県） …… 71
兵庫県立川西北陵高等学校（兵庫県） …… 73
大阪市立加美東小学校（大阪市） …… 75

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

岩手県立花巻清風支援学校（岩手県） …… 77
登米市立北方小学校（宮城県） …… 79
長野原町立北軽井沢小学校（群馬県） …… 83
海南市立加茂川小学校（和歌山県） …… 85
福山市立東小学校（広島県） …… 87
岩国市立周北小学校（山口県） …… 91
大分県立別府支援学校（大分県） …… 93
札幌市立東月寒中学校（札幌市） …… 95
千葉市立誉田東小学校（千葉市） …… 97
横浜市立一本松小学校（横浜市） …… 99
新潟市立高志中等教育学校（新潟市） ……101

実践事例協力校一覧 ……103

実践事例集について

本事例集は、平成 30 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において、各地域拠点の推進校で実施されたオリンピック・パラリンピック教育の特徴的な事例を集約したものである。後述する 5 つのテーマ別に、全 34 地域拠点における 45 事例を選定しその要旨を掲載している。令和元年度以降の有意義な事業展開に向けた参考資料として、また 2020 年の東京大会を契機とした日本のオリンピック・パラリンピック教育に関する記録として活用されたい。

1．本事業の目的

2020 年東京大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成 27 年 11 月 27 日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック・パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定した。また、文部科学省およびスポーツ庁で組織された「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（平成 27 年 2 月～平成 28 年 7 月）」の最終報告では、全国的なオリンピック・パラリンピック教育の普及の意義として、以下の内容が提示されている。

(1) スポーツの価値

・スポーツは、精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらし、人々が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む基盤。
・スポーツには、自己充実・自己変革を促す力、社会や世界を変える大きな力がある。

(2) オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義

・オリパラ教育の推進には、オリンピックの 3 つの価値（卓越 Excellence、友情 Friendship、敬意 / 尊重 Respect）とパラリンピックの 4 つの価値（勇気 Courage、決意 Determination、平等 Equality、インスピレーション Inspiration）が必要。
・オリパラ教育は、スポーツの価値の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて活躍できる人材を育成するもの。

（3）オリンピック・パラリンピック教育の具体的内容

・オリンピック・パラリンピックそのものについての学び（大会に関する知識、選手の体験・エピソード等）
・オリンピック・パラリンピックを通じた学び（スポーツの価値、参加国・地域の文化等、共生社会、持続可能な社会等）

本事業は、主に上記の内容および平成 27 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業」の成果をふまえ、全国中核拠点（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）と地域拠点（各自治体教育委員会等）が連携し、学校や地域

一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

2．平成 30 年度の事業概要

平成 30 年度における全国中核拠点と参加地域拠点を以下に示す。各地域拠点では、担当大学の支援を受けながら、2020 年東京大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の実践を展開した。

筑波大学　　：宮城県、福島県、茨城県、群馬県、愛知県、京都府、和歌山県、
　　山口県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市
日本体育大学：北海道、栃木県、千葉県、石川県、兵庫県、高知県、大分県、
　　長崎県、千葉市、新潟市、大阪市
早稲田大学　：岩手県、埼玉県、岐阜県、静岡県、滋賀県、広島県、香川県、
　　熊本県、札幌市、横浜市、静岡市

また各推進校では、以下の５つのテーマに基づきオリンピック・パラリンピック教育が実践された。なお、同テーマはスポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京 2020 組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）から構成される「スポーツ庁オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」において議論され、決定されたものである。

（本事業における「オリンピック・パラリンピック教育」のテーマ）

オリンピズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）の普及に向けて、以下のテーマを設定する。

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通したインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

本事例集では、各地域拠点の推進校における「実践報告書」の文面を抜粋し、冊子体裁の都合上、一部編集・用語の統一を行っております。なお複製、転載等の際には、スポーツ庁による承認手続きが必要となります。

実践事例１　佐野市立田沼西中学校（栃木県）

1 実践のテーマ

東京 2020 大会に向けた諸学習

2 対象者

全校生徒　278 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：栃木ブレックスとの交流会
　その他：総合的な学習の時間、一言英会話

4 目標（ねらい）

（1）総合的な学習の時間
　〇パラリンピック大会の位置づけや歴史、パラリンピックスポーツの種類、スポーツの多様性等について理解する。
　〇パラリンピックに係る資料やパラリンピックスポーツ体験を通して分かったことや感じたことを、整理してまとめることができる。
　〇進んで調べ学習に取り組んだり、仲間と協働してパラリンピックスポーツ体験に参加したりすることができる。

（2）栃木ブレックスとの交流会
　〇アスリートとの交流を通してスポーツの素晴らしさを実感し、夢に向かう努力や困難を克服することへの意欲や態度を培う。
　〇東京 2020 大会の正式種目となった３×３バスケットボールへの理解と興味・関心を高める。

（3）一言英会話
　東京 2020 大会では外国から大勢の方の来日が予想され、ボランティア活動等で外国の方と進んで関わりを持てるよう英語力の向上を図る。

5 取組内容

（1）総合的な学習の時間　実施学年：第１学年
　①資料を通してパラリンピック大会の位置づけや歴史等について学ぶ。
　②パラリンピックスポーツ「ボッチャ」の体験を通して、障がい者の競技性について考える。



③各自の東京 2020 大会に向けての思いや関わり方等を交流する。

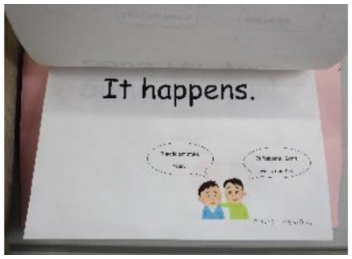
(2) 栃木ブレックスとの交流会　実施学年：全学年
①３×３バスケットボールについての説明とプレイ披露
②試合、フリースロー対決



(3) 一言英会話
今週の一言コーナーを作成し英会話のフレーズを毎週紹介した。







6 成果

○ボッチャの授業を通して、東京 2020 大会に向けて、パラリンピックスポーツへの興味・関心を持つきっかけとなった。また、性別、年齢、障がいの有無などに関係なくできるスポーツであることを理解することができた。
○東京 2020 大会の正式種目３×３バスケットボールへの理解が得られるとともに、プロのパフォーマンスを見て、応援したい、また見たいという気持ちが喚起された。
○一言英会話を用いて ALT と会話しようとする姿が見られ、コミュニケーションへの意欲が高まった。

7 実践において工夫した点（特色）

○地元栃木県にあるプロバスケットボールチームとの連携を図り、交流会を実施した。
○生徒の英語でのコミュニケーション力を高めるための一言英会話を英語科の担当教師と ALT を中心に考え、毎週示し、語彙やセンテンスを自然と増やせるように工夫した。

8 課題等

パラリンピックスポーツについて継続的に授業に位置づけ紹介し、興味・関心を持続できるようにする。

実践事例２　清須市立清洲東小学校（愛知県）

1 実践のテーマ

オリンピック・パラリンピック作品展

2 対象者

第１学年　77 名、第２学年　64 名、第３学年　72 名、
第４学年　70 名、第５学年　67 名、第６学年　54 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：作品展
　その他：総合的な学習の時間（第３～６学年）、学級活動（第１・２学年）

4 目標（ねらい）

○世界最高峰の障がい者スポーツの総合競技大会であるパラリンピックがオリンピックの後に行われていることを知る。また、その大会には多くの種目があり、日本人も多く参加していることを知る。
○オリンピック・パラリンピックに参加している国々を知る。
○オリンピック・パラリンピックにはどんな種目があるのかを知る。
○障がいがある人もない人も一緒にスポーツを楽しむことができるためには、どうしたらよいかを考える。
○相手のことに想像力を働かせ、どうしたらよいかを工夫し、知恵を出す子を育てる。
○ 2020 年に行われる東京オリンピック・パラリンピックについての興味・関心を高める。

5 取組内容

作品展（今自分たちができることは何か）
　オリンピック・パラリンピックコーナーの展示
【展示内容】
　第１・２学年…オリンピック・パラリンピックに参加する国の国旗作成
　第３学年…パラリンピックにはどんな種目があるのか、またどのようにルールが工夫されているか（グループ学習のまとめ）
　第４学年…オリンピック・パラリンピックに参加する国のまとめ（一人１カ国）
　第５学年…オリンピック・パラリンピック学習会に参加した感想と、今後、体が不自由な人に出会ったらどうするか（感想文）
　第６学年…パラリンピックの歴史・種目

2020年東京オリンピック・パラリンピックをより良くするために自分にできること（グループ学習のまとめ）









6 成果

調べたり学んだりしたことを作品展で展示し、全校児童や保護者、地域の人で共有したこと。

7 実践において工夫した点（特色）

○最初は第４学年を中心とした実施を予定していたが、全学年での取り組みに変更したこと。
○作品展のオリンピック・パラリンピックコーナーを、多くの人に見てもらえるように、入り口近くにしたこと。
○児童の作品に加え、調べ学習の様子や製作過程の様子をスライドショーにし、オリンピック・パラリンピックコーナーで映像を流したこと。

8 課題等

○調べたことをグループでまとめる時間が予想以上にかかったこと。
○作品展に向けて取組を進めたことはよかった。しかし、他の作品づくりと並行して進めたことで、オリンピック・パラリンピックに意欲を集中させられなかったこと。
○作品展までは意欲を高められたが、作品展終了後にもモチベーションが継続できなかったこと。

実践事例３　沼津市立第二中学校（静岡県）

1 実践のテーマ

体育理論を中心としたオリンピック教育の取り組み

2 対象者

全校生徒　134 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育

4 目標（ねらい）

○体育理論の学習を充実させ、スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関して学習を深めること、また、その学習を通して 2020 年に行われるオリンピック･パラリンピックだけでなく、スポーツ全般に興味関心を持ち、生涯にわたって運動に親しむ資質を育てること。
○オリンピックを目指している選手の母親であり、スポーツチームのコーチである方から話を聞き、その生い立ちや努力の足跡に目を向けることで、若者である生徒たちが自分自身の将来に可能性を感じること、また、夢に向かって自らが努力をすることの大切さ、その格好良さを学ぶこと。

5 取組内容

（1）第 1 学年の体育理論
　「①運動やスポーツの必要性と楽しさ」では、スポーツの歴史についてクイズ形式で触れ、スポーツの必要性や楽しさについて学んだ。「②運動やスポーツへの多様な関わり方」では、スポーツ競技会の映像を見て、その場あるいはその背景に出てくる登場人物を書き上げ、類型化することを通して、「する」「見る」「支える」「調べる」の関わり方があることを学んだ。ここで「③平野真理子氏・加藤耕也選手を招聘して講演会」を実施した。そして、「④運動やスポーツの学び方」では、オリンピックを身近に感じたところで、オリンピアンたちの戦い方に注目して技術、作戦・戦術がどのような構成になっているか、どのように身につけていくかを学んだ。

（2）第 2 学年の体育理論
　「①運動やスポーツが体にあたえる効果」では、オリンピアンと自分の体を比較し、健康に生活するための体力、運動やスポーツを行うための体力があることに目を向ける。そして、健康において運動が必要なものであることを

学んだ。「②運動やスポーツが心にあたえる効果」では、競技会の映像などを見ながら、オリンピアンがどのように力を発揮しているのか、主に感情のコントロールに注目する。また、パラリンピックにおけるルールの変更などに目を向け、スポーツをより多くの仲間と楽しめる工夫について学んだ。ここで「③平野真理子氏・加藤耕也選手を招聘しての講演会」を実施した。そして、「④安全な運動やスポーツの行い方」では、競技会中に起こりうる傷害や事故について考え、その対処などについて、どのような工夫がされているかを学び、体育の授業で各競技の試合を実施する際の注意点について考えた。

(3) 第３学年の体育理論

「①現代生活におけるスポーツの文化的意義」では、生涯スポーツの考えを元に、今後の生活の中でどのようなスポーツが整ったら、継続して運動をすることができるかを検討していくことで、スポーツの文化的意義について考えた。「②国際的なスポーツ大会の文化的な役割」では、1964年東京オリンピックや1998年長野オリンピックについての学習を通して、2020年に開催される東京オリンピックにはどのような価値があるのかを調べた。ここで、「③平野真理子氏・加藤耕也選手を招聘しての講演会」を実施した。そして、「④人々を結びつけるスポーツの文化的なはたらき」では、オリンピック・パラリンピックなどにおいて、どのような文化交流が進められてきたいのかを調べ、まとめることで、スポーツが人と人をつないでいくことについて学んだ。

(4) 平野真理子氏・加藤耕也選手講演会

講演テーマ:「挑戦することの大切さとオリンピック・パラリンピックの魅力」

6 成果

体育理論の学習の中核に講演会を置いたことで、オリンピック・パラリンピックへの興味関心が高まり、学習への意欲が増した。講演会直後に学活で卓球を行う学級が複数あり、卓球への興味が増したことも見て取れた。また、道徳で平野選手を題材にしたりするなど、「ねらい」としていなかった面からも深まりを持てた。

7 実践において工夫した点（特色）

○体育理論の中核に講演会を置き、オリンピック・パラリンピックについて講演会前に学習しておくと効果的なことや、講演会後に深められることを念頭に置き授業計画を行った。
○体育理論の授業を始めるにあたって、生徒たちの興味関心を高めるために「オリンピック・パラリンピック関連図書」のコーナーを設置した。

8 課題等

講師との打合せが難しく、図書購入の依頼が遅くなり、必要と考えていたタイミングで手元に揃えることができなかった。

実践事例４　香川県立坂出高等学校（香川県）

1 実践のテーマ

文化祭における「オリ・パラ展」の開催

2 対象者

第１学年　265 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：坂高祭「オリ・パラ展」

4 目標（ねらい）

○オリンピック・パラリンピック新聞制作や障がい者スポーツ体験、講演会を通じて障がい者スポーツに対する理解を深め、共生の大切さを学び、そして自分の生き方を考える機会とする。
○講演会を通じて、アスリートの生き方やスポーツに関する様々なキャリアを学ぶとともに、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会開催を契機に、生涯を通じたスポーツへの主体的・自発的な参画と、その発展に寄与する人材の育成を図る。
○障がいのある人が住みやすくなるために、社会はどう変わるべきかを考える機会とする。

5 取組内容

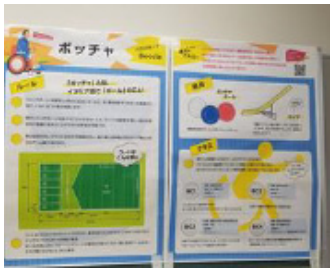
（1）展示
　①オリンピック・パラリンピック新聞
　　第１学年７クラスホームルーム委員（以下、HR 委員）各４名の計 28 名が、６つのテーマ（パラリンピックとは、パラリンピック競技種目、多様性の理解、東京 2020 大会エンブレム・マスコット、オリンピック・パラリンピックボランティア活動、大会会場）の中から１つテーマを選び、夏季休業中に新聞を制作し、展示した。
　②「パラリンピック種目を知ろう！」
　　パラリンピック競技紹介データ（東京都八王子市国際スポーツ大会推進室）やロンドン 2012 パラリンピック競技大会の写真パネル（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会）を展示した。
　③「クイズで知ろう！パラリンピックスポーツ」
　　国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」を展示した。
　④パラリンピック教育用デジタル教材の視聴

「夢に向かって 車いすアスリートの挑戦 副島正純」（早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター）の視聴コーナーを設置した。

(2) 体験コーナー

シッティングバレーボールとボッチャの体験コーナーを設置した。









6 成果

○人権・同和教育の立場からパラリンピックに焦点をあて取り組んだ。オリンピック・パラリンピック新聞は、生徒目線で制作され、多様な記事を展示することができた。

○シッティングバレーボール体験後のアンケートでは、「オリンピック・パラリンピック並びにスポーツの意義や価値等に対する理解・関心が高まりましたか」という問いに、「非常にそう思う」が 39%、「ややそう思う」が 55%であった。観るだけでなく、実際に自分で体験することで、障がい者スポーツを知ることができ、理解が深まった。

7 実践において工夫した点（特色）

第 1 学年各クラス 4 名の HR 委員計 28 名を中心に取り組み、それを第 1 学年全体、学校全体に広めようとした。

8 課題等

HR委員を中心とした第 1 学年の取組であった。この活動を学校全体に広めるために様々な授業（体育など）の中でオリンピック・パラリンピックを題材として積極的に取り扱いをするよう促すことで、理解の深化を図らせることができたらより良かった。

実践事例５　福岡県立久留米聴覚特別支援学校（福岡県）

1 実践のテーマ

クワイヤーホーンを使った 1964 年東京オリンピックファンファーレの演奏

2 対象者

中学部　２学年　５名

3 展開の形式

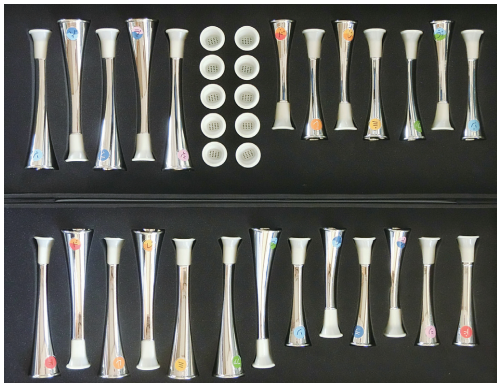
【学校における活動】
　教科名：音楽

4 目標（ねらい）

○ 2020 年のオリンピック・パラリンピック開催時には、日本（東京）に世界中の選手が集まることや、大会の開幕セレモニーでは、「ファンファーレ」というものが演奏されていることを知る。
○校内で開催する音楽発表会の開始時に、セレモニーとして、クワイヤーホーンでファンファーレを演奏する。

5 取組内容

○これまでのオリンピックで演奏されたファンファーレの映像を視聴する。（ロサンゼルス大会、東京大会等）
○ 1964 年東京オリンピックのファンファーレの楽譜を見て、曲を把握する。
○クワイヤーホーンの基本的な奏法を知る。





○クワイヤーホーンで複数の音を同時に鳴らすことにより、和音の響きを味わう。
○各音のクワイヤーホーンの担当者を決め、1964 年東京オリンピックで演奏されたファンファーレの練習をする（クワイヤーホーンは、単音のみが出る楽器であるため半音毎に 1 台ずつある）。
○音楽発表会の開演時に東京オリンピックのファンファーレを演奏する。



6 成果

○過去のオリンピックでのファンファーレを鑑賞する活動を通して、オリンピックの歴史について学ぶことができた。
○オリンピックの開会式に対して興味・関心をもち、次の東京オリンピックではどのような開会式が行われ、どのようなファンファーレが演奏されるのか、という関心が高まった。
○オリンピックではファンファーレが演奏されるが、デフリンピックではどのような形で開会式が行われているのかという疑問をもち、調べようとする姿が見られた。
○次の東京オリンピックに自分たちがどのような形で参加するのかについて考え、開会式のチケットの申し込み方法や、選手・ボランティアとしての参加などについて具体的にイメージを広げることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○聴覚障がいを有する生徒たちは、意識的に取りあげないと、開会式の音楽等の演出に気付きにくい状況がある。そのため、過去の動画等の資料を活用し、オリンピックに対するイメージを広げるようにした。
○簡単に和音を演奏できるクワイヤーホーンを使うことで、ファンファーレらしい演奏を行うことができた。

8 課題等

簡単に演奏が出来る分、クワイヤーホーンの音量は、ファンファーレとしては少し小さめだったので、音量を補充する工夫が必要であった。

実践事例６　札幌市立北園小学校（札幌市）

① 実践のテーマ

道徳の授業とオリンピアンの講演の関連づけ

② 対象者

第５学年　70 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　その他：道徳、総合的な学習の時間

④ 目標（ねらい）

○札幌オリンピックミュージアムを活用することで、ウィンタースポーツへの興味・関心を喚起し、オリンピック競技への理解を深めるとともに、12 月に実施するスケート学習や冬期間における体力向上の取組のきっかけ作りとする。
○夢の実現に向かって努力した人との出会いを通じ、自分の将来について考えを具体的に深めていくための視点をもつ。

⑤ 取組内容

(1)「オリンピック・パラリンピックについて知ろう」（総合的な学習の時間）
　オリンピック・パラリンピックについて知っていることをクラスで交流

(2) 札幌オリンピックミュージアムの見学（総合的な学習の時間）
　①オリンピアンの阿部雅司さんの講演
　②施設内の展示物の見学
　③札幌大倉山展望台から町の様子を見る

(3)「希望と勇気、努力と強い意志」（道徳）
　札幌オリンピックミュージアムでの阿部雅司さんの講演と「世界最強の車いすプレーヤー　国枝慎吾」（光村図書教科書 p.122-126）を活用した授業

(4)「スケートにチャレンジ」（総合的な学習の時間）
　校区内のスケート施設を活用してスケート体験を実施









6 成果

オリンピアンの体験談を聞いて、オリンピック・パラリンピックについて興味・関心をもつことだけでなく、スポーツの素晴らしさや夢に向かって諦めないで努力することの大事さを知ることができた。オリンピック・パラリンピックを身近に感じる良い機会となった。

7 実践において工夫した点（特色）

子どもたちの興味・関心を喚起するために、札幌オリンピックミュージアムに行く前に、写真や資料などを見ながら事前学習を行った。

8 課題等

札幌オリンピックミュージアムにおいて館内見学の時間が短かったため、体験的なプログラムを実施できない児童がいた。開始時間を早めるなどして、活動時間の確保ができれば、より充実した学習となる。また、札幌オリンピックミュージアムの見学とスケート体験の実施時期に開きが生じてしまったことから、実践のつながりが薄れてしまった。他の行事もあるので、計画的に配置していく必要がある。

実践事例７　京都市立東山泉小中学校（京都市）

① 実践のテーマ

様々な教科でのオリンピック・パラリンピック教育

② 対象者

第７学年　67 名、第８学年　67 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：音楽、保健体育、家庭
　その他：特別活動、道徳

④ 目標（ねらい）

○児童生徒が多様な違いを理解しながら、主体的に社会参画をしていこうとする態度を育てる。
○児童生徒がオリパラ教育を通じて、スポーツの価値に気づくことができる。

⑤ 取組内容

(1) オリンピック・パラリンピック・ムーブメントについての学習
　　保健体育：体育理論（第７学年）

(2) 伝統文化の体験を通して、世界の人をお迎えする態度を育てる
　　家庭：和装着付け体験（第７学年）
　　音楽：箏（第７学年）
　　特別活動：いけばな体験（第７学年）
　　音楽：和太鼓（第８学年）

(3) フェアプレイについての学習（第７・８学年）
　　道徳：①フェアプレイにおいて大切なことは？
　　②動画「ロンドン五輪バドミントン女子予選」（無気力試合）
　　③動画「サッカーロシアＷ杯　日本対ポーランド」（負けの中のボール回し）
　　④動画「U-18 野球Ｗ杯　日本対カナダ」（大量リードで盗塁）
　　⑤フェアプレイはスポーツだけでなく、日常生活に欠かせないもの





6 成果

それぞれが多様な違いを持って生活していることに児童生徒が気づき、それを踏まえて行動していくことの大切さ、自分自身が社会を構成する一人であるということを理解することができた。また、オリパラ教育に関わる各教科の授業や学活等で、東京 2020 の話題に触れることで、児童生徒の中で身近な存在として捉えることができるようになってきた。

7 実践において工夫した点（特色）

昨年度から教職員会議にて、オリパラ教育を進めていくことを共通理解した。今年度も引き続き取り組んでいくことで、教育活動の中でなにができるのかを教職員が考えた。その際、すべてのものを新たに取り組むものにするのではなく、既存のものをどのようにつなげていくかを大切にして、一年間を計画した。

実践事例８　大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校（大阪市）

1 実践のテーマ

オリンピック・パラリンピックに関する文化祭での取組

2 対象者

全校生徒

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：文化祭

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピックについて研究・体験・展示することにより、その意義を知り理解を深める。

5 取組内容

(1) オリンピック・パラリンピックについてその歴史・意義などを研究し、展示発表を行う。

(2) オリンピック・パラリンピック種目の紹介

(3) 競技用車椅子の展示と試乗体験

(4) 走高跳・走幅跳の世界記録の例示





6 成果

展示制作に参加した生徒たち自身がオリンピック・パラリンピックについて、研究することにより理解を深めた。また、多くの生徒たちがオリンピック・パラリンピックを身近に感じるきっかけとなった。

7 実践において工夫した点（特色）

全校生徒から参加生徒を募り、オリパラ生徒推進チームを発足させた。また、本校の特色である海外交流の展示発表を隣の教室で行うことにより、取りくみの内容をリンクさせた。

8 課題等

クラスやクラブ活動の取組みに時間を取られるため、オリパラ生徒推進チームが全員揃って活動することに制限があった。

実践事例１　下妻市立大宝小学校（茨城県）

1 実践のテーマ

わたしたちの茨城国体　～茨城国体サポーターになろう～

2 対象者

全校児童　225 名、保護者、園児　22 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：保護者授業参観「1/2 成人式における活動報告会」
　その他：総合的な学習の時間、全校集会
【地域における活動】
　イベント名：県西ブロック授業研究会における PR 活動
　その他：下妻市国体推進室へ「茨城国体応援うちわ」の贈呈

4 目標（ねらい）

2019 年「いきいき茨城ゆめ国体」、2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、自分たちがどのように関わっていくか考え、進んで応援活動に取り組むとともに、実践活動を通して、「おもてなしの心」と「ボランティア精神」の醸成を図る。

5 取組内容

（1）第４学年　総合的な学習の時間（全 38 時間）
「わたしたちの茨城国体～茨城国体サポーターになろう～」
①国体について調べよう（14 時間）
②国体サポーターになろう（12 時間）
③広めよう！わたしたちの茨城国体（12 時間）
「茨城国体サポーターになろう」を中心テーマとして、茨城国体を盛り上げるために自分たちにできることを考え、応援グッズの作成や、他学年の児童、保護者、来校者や地域への PR 活動、自分たちが作成した応援グッズを配付する活動等を行った。





マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成

(2) 第４・５学年　総合的な学習の時間（各２時間）

「オリンピック・パラリンピックサポーターになろう」

茨城国体サポート活動の発展として、オリンピック・パラリンピックにどう関わっていくか話し合い、それに基づいて実践活動を展開した。

第４学年実践活動：集会活動等における PR 活動の計画立案

第５学年探究活動：パラリンピックの意義について考える活動

(3) 茨城国体、オリンピック・パラリンピック応援活動報告会（1 時間）

第４学年の授業参観「二分の一成人式」において、茨城国体、オリンピック・パラリンピック開催に向けて、自分たちが取り組んできた応援活動についての報告会を行った。

(4) 茨城国体、オリンピック・パラリンピック応援集会（全校集会）

6 成果

○様々な実践活動を通して、「自分たちの力で茨城国体を盛り上げたい」という思いを深めることができた。児童一人一人が、スポーツを通して、人々がつながることの素晴らしさに気付くことができた。

○下妻市教育委員会生涯学習課国体推進室に協力を依頼し、連携を図りながら取組を行った。国体に関する情報提供、茨城国体イメージキャラクター「いばラッキー」の活用、応援グッズ作成やその活用方法等について、児童の主体的な活動を支援することができた。また、国体推進室の職員を GT とする授業を２回実施した。その授業の様子や本校の取組について、下妻市の HP や下妻市議会だより、茨城新聞等に掲載され、茨城国体の PR にもつながった。

7 実践において工夫した点（特色）

○下妻市教育委員会生涯学習課国体推進室との連携による授業づくり

○児童の主体的な活動による茨城国体応援活動

8 課題等

講演依頼や各種事務手続き（申請書・報告書等）の簡略化

実践事例２　京都府立鴨沂高等学校（京都府）

1 実践のテーマ

留学生との交流

2 対象者

第３学年　３組「京都文化コース」クラス　37 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：京都文化の発信

4 目標（ねらい）

　姉妹校であるフランスオクシタニ州モンペリエ市ジュールゲード国際高校生との連携や、急増する外国人観光客との交流に向けて、同志社大学留学生への鴨沂高校、京都御苑周辺ガイド体験を実施し、自文化に対する理解を深めるとともに、国際感覚やコミュニケーション能力を磨く。また、成果物や培った手法を用いて「オリンピック･パラリンピック」に向けた、より良い「国際交流の在り方」や「文化発信の在り方」等について提言をする。

5 取組内容

(1)「ガイダンス」　※以下、ワークショップを「WS」と表記
　①ガイダンス－目的及び年間授業計画についての概説
　②概要
　・鴨沂高校とその周辺のガイドマップを作成し、実際に留学生にガイドを行う。
　・異文化理解、多文化共生など、国際的な課題について、講師や留学生とともに考える。「難民・移民問題」など
　・取り組んだ内容の中から、各自テーマを設定し、個人研究論文を作成する。

(2)「課題設定」
　鴨沂高校とその周辺について、紹介・案内したいことについて考える。他の人のアイデアを参考に、各自テーマを絞る。

(3)「調査・研究」
　各自テーマについて調べる。

(4)「同志社大学留学生との交流」
　講師：同志社大学准教授 木谷　真紀子 氏
　同志社大学留学生（アメリカ、コスタリカ、フランス）　各１名
①事前学習―文化発信について。文化交流について。
②講義（木谷氏）
③留学生より母国の文化紹介
④高校文化コース生徒によるショートスピーチ
⑤WS―グループごとに留学生とのワークショップ




(5)「調査・研究」
①各自テーマについて調べる。
②現地取材（「鴨沂高校（荒神口校舎）、京都苑御のフィールドワーク」）

(6)「まとめ」
　調べたものをまとめ、ガイドマップを作成する。（日本語・英語）

(7)「相互評価」
　留学生へのガイドに向けて、各班概要発表後、相互に評価し、内容を修正する。

(8)「国際理解」「難民問題、移民問題」「多文化共生」について考える
　WS―「いのちの - 持ち物けんさ」
　国連 UNHCR 協会、学生団体 SOAR
　難民支援に携わる学生ボランティアによるワークショップを実施し、国際的な課題について考える。

(9)「留学生へのガイドに向けて、プレガイド演習」
　作成したガイドマップを基に、コースをプレガイドする。

(10)「留学生へのガイド」（日本語・英語）
①作成したガイドマップを基に、グループごとにコースをガイドする。
②WS―グループごとに留学生と交流（振り返り）
（フランス、インドネシア、アメリカ、ルーマニア）各１名
（オーストラリア、韓国）各２名
　計８名（同志社大学留学生）






（11）「相互評価・振り返り」「ガイドマップの修正（日本語・英語）」

（12）「京都文化発信成果物作成（個人研究）」
研究論文（個人テーマ、英語サマリー等）
京都文化に関わる個別テーマに基づいた小論文、個人研究

6 成果

○文化の祭典でもあるオリパラに向けて、京都文化発信や京都文化交流に関わるプログラムや成果物を提言することができた。
○留学生との交流を通して、異文化を深く理解することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○学校設定科目・特別コース授業を通した文化発信に関わる取組
○同志社大学留学生など、地域の大学等諸機関との連携

8 課題等

○取組の成果の共有化に向けた、発信や提言の為の外部との連携
○実施にあたる校内指導体制作り、活用事業等予算面などの活用

MEMO

実践事例３　福山市立加茂小学校（広島県）

① 実践のテーマ

オリンピック・パラリンピックをテーマにした朝会の取り組み

② 対象者

全校児童　650 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：学校朝会、委員会活動

④ 目標（ねらい）

　朝会や委員会活動を通して、オリンピック･パラリンピックの精神を学び、スポーツの意義や価値に対する関心の向上、障がい者理解、国際理解、ボランティア精神の育成を図るとともに、他者を思いやる気持ちを育てる。

⑤ 取組内容

（1）学校朝会
　毎月１度、「おもてなし」をキーワードに、オリンピックを絡めた話をした。
　　10 月・・・㊞もいやり
　　11 月・・・㊞ラル、マナー
　　12 月・・・㊞をつなごう（国際理解）
　　１月・・・㊞かよく暮らそう（共生社会）
　　２月・・・㊞あわせな社会をつくる私
　例えば・・・
　　【10 月のテーマ：おもいやり】
　　2020 年に東京で何が行われるか問い、オリンピックについてクイズをしていく中で、２年後に外国から来るたくさんの人をおもてなしするということを伝えた。次に、生活の中にあふれている「おもいやり」（動く廊下、車いす用の自動販売機、ヘルプマークなど）を写真で提示し、クイズ形式で、何が思いやりかを考えた。さらに、加茂小学校で見つけた「おもいやり」を紹介した。

（2）委員会活動（第６学年）
　①朝会で行ったオリンピック・パラリンピック教育に合わせて、掲示物を作り全校に呼びかけた。（掲示委員会）
　②給食放送でオリンピック・パラリンピッククイズを行った。（給食委員会）

(3) 元サッカー日本代表　福田正博さん　講演会

【事前】

①福田正博さんについて調べたことを紹介する掲示物を製作。(掲示委員会)

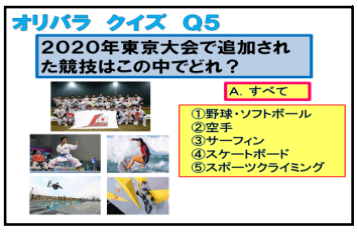
②「おもてなし」をキーワードに福田さんとの交流会を企画。(児童会)

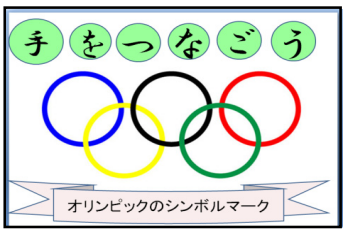
【当日】

「夢とチャレンジ」について講演とサッカーの実技指導

【事後】

お礼の手紙や学んだことを作文に書いた。(全校児童)







6 成果

○月に１度の学校朝会でのオリンピック・パラリンピック教育や、掲示委員会が作成した掲示物、放送委員会によるオリンピック･パラリンピッククイズにより、オリンピック・パラリンピックを身近に感じ、興味・関心をもつ児童が増えた。

○福田正博さんの講演で、フェアプレーの大切さや、素直な気持ちをもつこと、夢をもってチャレンジをすることなどを児童の生活にも置き換えて話してくださり、全員がとても熱心に話を聞いていた。講演後の振り返りでは、自分の夢について改めて考えたり、相手の悪い所ではなく良い所を見るようにしようと考えたりする児童が多くいた。

7 実践において工夫した点（特色）

○学校朝会では、本校の児童の実態に沿って、養いたい倫理観を含めた話やオリンピック・パラリンピッククイズのスライドを用いて行った。「おもてなし」を大テーマとし、毎月、定期的にオリンピック･パラリンピック教育を行うことで、児童の関心を高めていくようにした。

○福田正博さんとの交流会は児童会の児童が主体となり、企画・進行をした。児童あいさつやプレゼント準備、掲示物作成等「おもてなし」をキーワードに交流会を行った。

8 課題等

○オリンピック・パラリンピック教育を教科、領域にどのように位置付けていくか考え、計画的に実践していく必要がある。

○活動を充実させていくためには、全教員がオリンピック・パラリンピック教育についてさらに研修を行い、協力体制を整え、継続的に行う必要がある。

実践事例１　宮城県南郷高等学校（宮城県）

1 実践のテーマ

被災地復興支援（ボッチャ体験等）

2 対象者

第１学年　49 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：被災地復興支援

4 目標（ねらい）

○スポーツを通して、希望を持ち挑戦する心を養い、地域や社会に貢献する力を育む。
○被災地支援や地域貢献の一環として、地域の小･中学生や高齢者、障害者とスポーツ交流を行う。

5 取組内容

本校より 20 キロほど離れた石巻の被災地住宅内にある公民館を会場に、農産物販売や餅つき・振るまい、クリスマスリース作り体験、ボッチャ体験の各班に分かれ交流した。参加した生徒は、足腰に負担がかからないように椅子を設置したり、ルールをわかりやすく伝えようとしたり、様々工夫していた。そして、地域の方と交流することを通して、お年寄りから子どもまで参加しやすい環境作りについて今後の課題を見つけ出した。

参加者からは「テレビで観て知っていたけど、実際にやってみて面白かった」、「座ってもできるスポーツだから誰でも挑戦できるね」といった感想が寄せられた。足腰に負担がかからないように椅子を使用したことについても触れられ、工夫したことが反映された感想といえる。





6 成果

全校生徒によるアンケートの結果から、生徒主体の運営に対する興味、企画運営への意欲が向上したことがあげられる。

7 実践において工夫した点（特色）

学習したことを学校外で活かす場を設けた。

8 課題等

○これまでの教育活動をオリンピック・パラリンピック教育という角度から見つめると、オリンピック・パラリンピック教育といえる活動は結果として実践されていた。今後は、意図的･計画的･組織的に他の教育活動とリンクさせながら、タイミングやどのような教材、アプローチが生徒の興味関心を高め理解度を深め広がっていくのか、研究していく必要がある。
○復興五輪・パラリンピックを果たす 2020 年東京大会となるためには、東日本大震災の被災地にいる高校生としてまた宮城県として何をすべきなのか、生徒とともに考え発信する必要がある。それがオリパラ教育の一つになると考える。
○パラリンピック講演会では、地域に参加を呼びかけたが、一般の方々の参加者はなかった。その理由は、周知方法や時期、場所、テーマ、地域特性等、何なのかを考える必要がある。
○複数校や地域との協同開催、協働的学習によって得られる成果も大きいと考えられる。地域貢献や地域協働の在り方をオリパラ教育という視点からも見つめてみたい。
○一過性の取り組みではなく、担当者が変わっても、2020 年開催後にも継続する必要がある学習活動については継続・発展させて取り組みたい。

実践事例２　宮城県利府高等学校（宮城県）

1 実践のテーマ

地元プロスポーツチーム（楽天イーグルス）の施設見学会

2 対象者

第３学年　42 名（希望者）

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：家庭（生活と福祉）
行事名：バリアフリー施設見学会

4 目標（ねらい）

実際に行われているバリアフリー化への取り組みやサービスを紹介してもらうことにより、障がい者がスポーツ観戦をする上での問題点などを考え、障がい者の自立支援、介護・看護に関する知識・技術を深める一助とする。

5 取組内容

楽天野球団の協力を得て、「楽天生命パーク宮城」において地域密着活動や施設のバリアフリー化への取り組みについて講演をしていただいた後、実際に施設を見学させてもらった。第３学年の選択教科「生活と福祉」の授業において、車イス体験や視覚障がいの疑似体験をしているが、実際にどのようなサービスが行われているのか、障がい者向けの最新の設備がどのようなものであるのかなどを直に見ることができ、貴重な体験となった。

（1）講演

楽天生命パーク宮城内の一室において、楽天野球団ボールパーク本部ボールパークオペレーション部部長 大野憲一 氏による講演をいただいた。

球団創設時からどのようにしてファンを獲得・定着させるための努力をしてきたかなど、スポーツを支える立場から講演していただいた。その中でバリアフリー化についてもふれ、施設面だけではなく障がい者へのサービスにも注力していることが紹介された。

プロとして、慈善事業ではなく経営が成り立たなければならないことなど、高校生にとって現実味のある内容もあり、授業で学んできた知識と比較しながら真剣に聴き入っていた。




(2) バリアフリー施設見学

講演後、実際に楽天生命パーク宮城の施設見学ツアーを行った。バックヤード見学後、実際に車いすで来場した場合の対応などを体験し、スムーズに移動できる動線が確保されていることを説明していただいた。






また、３塁側内野席にある車いす専用席には、ファールボールに備えてネットがかけられている。しかし、風船を飛ばすなどのイベント時にはすぐにネットがはずされ、またそのための人員が配置されていることなどの説明があった。見学途中では、車いすのままでも利用しやすい最新の多目的トイレも見学することができ、その機能を説明していただいた。

全体を通して、授業を通して学校内で学んできたことが実際にどのように取り組まれているのかを体験することができ、有意義な企画であった。特に、障がい者がスポーツを楽しむことをサービス業として成り立たせている楽天野球団の取り組みは、生徒にとって新鮮だったようである。

6 成果

実施後の最初の授業で、振り返りとしてアンケートを実施したが、全員が今回の企画が有意義であったと答えてくれた。その中でも多かった感想として、以下のようなものがあった。

○プロ野球だけでなく様々なイベントを実施しており、お客さんが楽しめる工夫をしていることがわかった。
○球場を利用したことはあるが、車いすのままでも楽しむことができることが初めてわかった。
○施設面だけではなく、サービスとしてきちんと人が配置されているなど、高齢者や障がい者にも配慮していることがわかった。
○安全面で細かいところまで気配りされていることがわかった。
○最新の多目的トイレは、よく考えられていると思った。

以上のように、身近な施設ながら障がい者へのサービスが具体的にどのようになされているのかを初めて知ったという生徒が多かった。授業で学んだことが実際にどのように活用されているのかを体験することができ、知識を深めることができたようである。

7 実践において工夫した点（特色）

事前の授業で車いす体験などを実施し、校舎内で基本的な操作方法を学んでから参加させた。また、バリアフリーの施設はなかなか実際に見る機会がないため、見学前後の授業で補足するなどし、理解が深まるようにした。

事前に楽天野球団と綿密に連絡を取りあって準備していたので、当日は非常にスムーズに実施することができた。

8 課題等

当初は、全校生徒または３学年生徒全員を対象に実施してもらうことも検討したが、年度途中からの立案・計画では実施できなかった。そのため、家庭科「生活と福祉」の授業の一環として実施し、３学年の希望者を加える形で実施した。しかし、実際に行ってみると補助者・介護者の育成という点だけではなく、スポーツを支える視点や障がい者もスポーツを楽しむインクルーシブ社会を作るための視点など、オリンピック・パラリンピック教育を通して学ばせたい内容がたくさん盛り込まれていた。参加した生徒の感想も上々で、もっと多くの生徒に体験させたかった。

MEMO

実践事例３　佐倉市立根郷中学校（千葉県）

1 実践のテーマ

福祉体験学習を通した共生社会に向けた実践力の育成

2 対象者

全校生徒　266 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

「心のバリアフリープロジェクト」の実践を通して、認め合い、学び合い、共に生きようとする心と実践力を持った生徒を育成する。

5 取組内容

（1）車椅子体験講座

地区社会福祉協議会、市ボランティアセンター、市障害福祉課の協力により、車椅子体験を行った。介助に関わる心構えや乗っている人に発生する不安感、段差の乗り越え、降りるときの介助方法等の講義後、実際に車椅子に「乗る」「介助する」体験を行った。初めて車椅子に乗り、人の手を借りて介助を受けることの不安を実感し、障がい者理解と介助のポイントの理解へつなぐことができた。



（2）手話体験講座

地区社会福祉協議会、社会福祉法人「愛光」の協力により手話体験を行った。

全体講義で手話の基本動作を学び、個々に与えられた課題により、手話の実践練習を行った。はっきりとした動作で相手の手話を理解することは簡単ではなく、試行錯誤の連続であった。しかし、



手話という手段により互いに理解し合える経験は、共生の意識を高めるなどボランティア活動の意欲化につながるものとなった。

(3) 社会福祉施設訪問

本校の隣地にある社会福祉施設をクラスごとに訪問し、施設利用者の方々との交流を行った。陶芸・園芸・生産作業などのグループに分かれ、施設利用者と共に作業実習を行った。自分の能力や適性に合せて作業を行っている姿に触れることは、生徒自身が自己の能力や適性を考え、自己理解を進める良い機会となった。



6 成果

車椅子体験、手話体験の他に、「点字体験」「アイマスク体験」を実施している。障がいを持つ方の状況や介助者の行動・手法等を疑似体験することにより、障がいを持つ方の気持ちや生活状況の理解に近づいていくことができる。共生社会の形成に向けて、相互理解の必要性が高まる中、体験を通じて学んでいくことの意義は高いと考えている。

7 実践において工夫した点（特色）

○クラス単位で実施し、車椅子の操作と介助を体験するためには、少なくともクラス生徒数 1/2 の台数の車椅子が必要となる。その確保のために関係外部機関、団体との連絡調整と一定期間の借用に努めた。同時に、講師の人数の確保と調整も必要とした。（車椅子体験講座）

○隣地に社会福祉施設がある地の利を生かして取り組んでいる。生徒の移動が短時間で行えることは、体験時間を長く設定できることにつながる。（社会福祉施設訪問）

○社会福祉施設とは、開校時から様々な活動で連携してきた。それぞれが企画する活動での相互連携が本実践の橋渡しとなっている。（社会福祉施設訪問）

8 課題等

車椅子等は学校における体験学習のために用意されているものではないため、台数の確保や日程調整には多くの時間を要する。学校で用意できるものについては、先を見通した計画的な予算立てを行っていく必要がある。

実践事例４　八百津町立八百津中学校（岐阜県）

1 実践のテーマ

人権教育とパラリンピアンの講演・実技指導を関連づけた年間を通じた取り組み

2 対象者

全校児童　232 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育
行事名：ひびきあい集会（人権教育）
その他：道徳、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○他を思いやる心の大切さについて、年間を通して考え、実践することで一人一人が人権感覚を磨くことができる
○安心･安全な学級･学校をつくりあげていくために必要なことを一人一人が考え、実践することができる
○普段の生活では知ることができない様々な立場の人の考え方を知り、自分の考えや行動を見つめ直すことで、今後の生活につなげることができる

5 取組内容



（1）１学期の取り組み
①ひびきあい道徳（5 月 30 日）
「おもいやり」に関わる資料を通して、他を思いやることの大切さや、自分が今後どのように生活を送るべきかを考える
②ひびきあい学活（6 月 5 日）
ひびきあい道徳の内容を踏まえ、学活の中で自分たちの学級の課題を明らかにして、年間を通して学級で大切にしていく「安心・安全宣言文」を作成する
③ひびきあい集会（6 月 8 日）
各学級で作成した「安心・安全宣言文」を全校の前で発表し、共通理解を図る

(2) ２学期の取り組み

①ひびきあい道徳（11 月 28 日）

「公正・公平・社会正義」に関する資料を通して、自分自身の生活について振り返る

②ひびきあい学活（12 月 7 日）

1 学期に考えた各学級の「安心・安全宣言文」に対する自分たちの学級の意識の高まりについて話し合う

③ひびきあい集会（12 月 11 日）

各学級で行ったひびきあい学活の内容を全校に報告し、全体で振り返りを行う





(3)「ひびきあい講演会」（12 月 11 日）

①授業でのゴールボール体験（12 月 10 日）

全学級が保健体育科の授業内で、保健体育科の教師の指導の元でゴールボールを体験

②ゴールボール元日本代表の中嶋茜さんによる実技指導と講演（12 月 11 日）

実技指導では、代表生徒による試合も実施

「福祉という言葉が必要ない社会へ」という演題で講演を実施

テーマⅢ

6 成果

年間を通して取り組む人権に関わる学習の一つとしてパラリンピアンによる講演会を計画したが、講演会の講師である中嶋茜さんの話の内容と本校の人権教育の取り組みを関連づけることができたことから、年間の取り組みを「思いやり」という一本の線でつなげることができた。また、全校生徒が事前にゴールボール体験を行ってから中嶋さんの実技指導や講演に臨んだため、視覚に障がいのある方との関わり方について考える契機となった。さらに、中嶋さんが生徒に質問をしながら講演を進めていただいたおかげで、ただみんなで話を聞くという会ではなく、みんなで考える会になった。

7 実践において工夫した点（特色）

本校における人権教育の年間を通した取り組みとオリンピック・パラリンピック教育を一つの線につなげるために、講師の中嶋さんに「福祉という言葉が必要ない社会へ」という演題で講演していただいた。また、中嶋さんの実技指導と講演の事前学習として、ゴールボールの用具等を準備して、全校生徒が体験する時間を設定した。

8 課題等

本校の人権教育に関する取り組みに沿った内容のお話しをしていただくことができる講師の方を探すこと。

実践事例５　伊豆の国市立大仁小学校（静岡県）

1 実践のテーマ

道徳の授業とパラリンピアンの講演・実技指導を関連づけた実践

2 対象者

第４学年　73 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間、道徳

4 目標（ねらい）

　パラスポーツを体験し、その理念や携わる人々（選手、サポート）の思いについて共感的に考えることを通して、思いやりをもつ美しさや、どんな人たちとも支え合い、共に生きていく素晴らしさについて考える事ができる。

5 取組内容

(1)「I'mPOSSIBLE」を活用してパラリンピック全体の知識理解を深める授業を実施した。「失った物を数えるなできることを最大限に生かせ」という言葉は子ども達がアスリートの気持ちに触れる貴重な一節となった。また、「I'mPOSSIBLE」の「ブラインドランナー」についての箇所を提示しながら、種目についての理解を深めた。

(2) パラリンピック独自の種目であるボッチャ体験を行った。最初は感覚で投げていた子ども達が、途中からは、少しずつ戦略を考えるようになり、夢中になっていく様子が見られた。後半は、どんな人も平等に参加できる種目の特性を感じてもらいたいと、様々な身体的ハンディが書かれた「カード」を作成した。ハンディが投げることにどんな苦労があるか、また工夫ができるか思考する場面が見られた。

(3) パラリンピアンの鈴木秀俊さん（陸上）と伴走のサポートの青木さんを招聘して、講話と模範演技をしていただいた。最後の質問会では、誠実に回答をしていただいた。中でも「もし、目が見えるようになったら何をしたいか」という質問に「伴走者をしたい」という、鈴木先生の回答は、選手がサポートランナーにどのような思いを持っているかが伝わってきた。

(4) これまでの取り組みを基に「親切・思いやり」という道徳的諸価値について、

より実践意欲を高めることを目的とした授業を行った（「心をつなぐ一本のロープ」）。児童は、鈴木さんの講演等のこれまでの実践を思い浮かべながら、お互いの思いを語り合うことができた。

(5) 図書館司書の協力を得て、関連図書を多く展示した。







6 成果

○昨年度、本事業で経験した「ボッチャ」にじっくり親しむことができた。
○パラアスリートの鈴木選手とサポートの青木選手との交流会では、選手の凄さを実感するだけでなく、チャレンジする素晴らしさや、お互いを信じて支え合う美しさを二人の姿を通して感じることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○ボッチャ体験では、動画を視聴しながら、ルールを確認した。ブルーシートを用いた簡易ボッチャコートを作成したことで、スムーズに体験が進み、時間短縮につながった。
○関連図書の展示では、普段から手に取れるように工夫した。

8 課題等

○パラリンピアンの紹介や仲介をしていただきたい。
○今後も、４年生総合、福祉教育とパラリンピック体験等を関連づけることで、双方の理解の充実を図りたい。学習を通して、子ども自身で考える「わたしの」パラリンピックや福祉のあり方を見つめる機会としていきたい。

実践事例６　滋賀県立長浜養護学校（滋賀県）

① 実践のテーマ

ボッチャを活用したスポーツ交流

② 対象者

第１学年　10 名

滋賀県立伊吹高等学校
第１学年１組　40 名（体育コース）

③ 展開の形式

【学校における活動】
　その他：特別活動

④ 目標（ねらい）

　障害の有無、年齢に関わらず楽しめるスポーツのひとつであり、パラリンピック種目のひとつでもあるボッチャを活用して、生涯にわたってスポーツを親しむための運動習慣の確立や余暇の充実を図る。また、インクルーシブ教育の一環として、ボッチャを通して養護学校と高等学校普通科の生徒同士が交流し、相互理解を深める。

⑤ 取組内容

（1）事前学習
　長浜養護学校の生徒は、事前に数回ボッチャに取り組み、ルールやゲーム性などの理解を深めた。

（2）ボッチャ交流会
①長浜養護学校の生徒が、伊吹高校の生徒の前で、見本のゲームを見せなが





らルール説明を行った。
②養護学校の生徒と伊吹高校の生徒が試合を行った。



6 成果

○ボッチャは、ボールを投げるという動作がメインの運動であるので、運動が苦手な生徒にとっても、消極的な気持ちにならずに取り組むことができた。
○交流をした伊吹高校の生徒は、体育コースに所属しており、ただ単に楽しむというだけでなく、どうすれば楽しくできるか、勝てるかなどを工夫して活動できた。分教室の生徒にとっても、高校生に触発されいつも以上に意欲的に活動ができた。
○高校生との交流をすると、サッカーやバスケ、バトミントンなどの運動は、力の差がでてしまうことが多いが、ボッチャは、差が出ずに競い合うことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○分教室は伊吹高校内に併設されているため、インクルーシブ教育の一環として、年に数回交流をしている。ボッチャは、実態に関係なく、楽しめるスポーツとして選択した。今年度だけで終わらずに、今後継続的に取り組んでいきたいと考える。

8 課題等

○今回は、学校ごとにチーム編成をしたが、両校の混合チームを編成して対戦することも取り入れればよかった。また、ボッチャ交流を今回だけでなく、継続的に取り組むことで、よりゲーム性が高まり、活動に幅が出るのではないかと考える。
○今回は、軽度の知的障害の生徒との交流であったため、公式なルールで取り組んだ。障害の程度により、ルールを簡略化したり、コートの大きさを変更したりすることで、幅広い交流を深めることができると考える。

実践事例７　篠山市立城東小学校（兵庫県）

1 実践のテーマ

地元の大会を活用したパラリンピックの学習

2 対象者

第３学年　28 名、第４学年　11 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○パラリンピックについて知って、興味・関心を高める。
○パラリンピック競技について調べ、ルールや用具を工夫することで障害のある人でもスポーツに取り組んでいることを理解する。
○パラリンピック選手との交流を通じ、生き方や競技に取り組む姿勢を知り、自分の生活に生かす。

5 取組内容

（1）パラリンピックへの理解を深める

　クイズを通してオリンピックとパラリンピックのシンボルマークを紹介し、それぞれの大会について知っていることを話し合った。篠山市で開催されているパラリンピック競技（車いすマラソン）を紹介し、パラリンピックについて知りたいという意欲･関心を高めた。



（2）車いすマラソン大会に向けた、応援グッズ作成

　毎年９月に全国車いすマラソン大会が篠山市で開催される。校区内をコースが通過することから応援グッズを作成し、沿道で応援することで実際の競技の魅力に触れる予定であったが、台風接近により大会中止。

（3）調べ学習

　パラリンピックについて、グループごとに事典やインターネットなどを使用し



て調べ学習を行い、模造紙にまとめ、発表した。

(4) 全校、保護者、地域への発表

第３学年が学習発表会で、調べ学習でまとめた内容を中心にクイズを交えながら全校生や保護者などへ発信した。

テーマ「知ってる？パラリンピック～３年生パラリンピック応えんし隊～」

《主な発表内容》

○東京オリンピック・パラリンピックの開催決定
○東京オリンピック・パラリンピックマスコット
○パラリンピックはどのような大会？
○パラリンピックの歴史
○パラリンピック競技の紹介、競技の工夫
○車いすマラソンの紹介



(5) 車いすマラソンパラリンピアンとの交流（講演・体験会）

(6) ボッチャ競技体験

6 成果

○学習前はパラリンピックのことを知っている児童は少なかったが、学習したことでパラリンピックの知識が増え、興味関心を持つ児童が多くなった。
○学習発表会で、保護者や地域の方にもパラリンピックについて知ってもらうことができた。
○障がいのある人でもルールを工夫することでスポーツを楽しむことができることがわかった。

7 実践において工夫した点（特色）

○地元で開催される車いすマラソンからパラリンピックについて展開したこと。
○調べたことを実際に体験する機会を設定したこと。
○調べたことを、保護者や地域に発信したこと。

8 課題等

○体験ができない競技は、動画などを見せることができれば、より具体的なイメージを持たせることができた。
○ I'mPOSSIBLE などの配布されている教材が活用できるように計画していく。
○教育課程での位置づけをしていく必要がある。
○講師となる方との交渉が難しい（金銭面など）。

実践事例８　今治市立北郷中学校（愛媛県）

1 実践のテーマ

新しい障がい者スポーツの発信

2 対象者

第２学年、第３学年

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育（第２学年）
その他：総合的な学習の時間（第３学年）

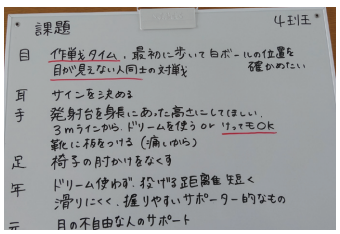
4 目標（ねらい）

○真の共生社会づくりへの意欲や態度の育成
○多様化する社会の中でよりよく生きる力の育成
＜テーマ＞
全ての人が幸せに暮らせる社会をつくろう
～新しい障がい者スポーツを発信しよう～

5 取組内容

（1）第３学年
「ボッチャを基本形とした新しい障がい者スポーツづくり」
様々な障がいのある人や高齢者を想定し、みんなで一緒にボッチャをプレイする上で困ることと、それに応じた「それぞれのルール」を考えた。それぞれのルールで実践し、さらに新しい課題を発見し、話合いの中で試行錯誤しながらよりよい方法を工夫していった。実践と話合いを繰り返し、公平な競技となるような用具の工夫や、全ての人が楽しむためのルールの改善を続けた。







（2）第２学年
①「障がい者スポーツの視点から見たバレーボールの実践」
保健体育科の授業の中で運動の得意な人も不得意な人も皆で楽しむこと

を目的としたルールの改善を行った。単元の最後にはシッティングバレーなどの障がい者スポーツも体験した。

②「ボッチャを基本形とした新しい障がい者スポーツづくり」

学習の流れは第３学年とほぼ同様であるが、第２学年は視覚障がいに焦点を当て、ルールづくりを行った。前段階で、パラ陸上競技 200m のメダリストである矢野繁樹氏の講演会を実施したことから、講演の内容を基により具体的な支援の方法を考えることができた。



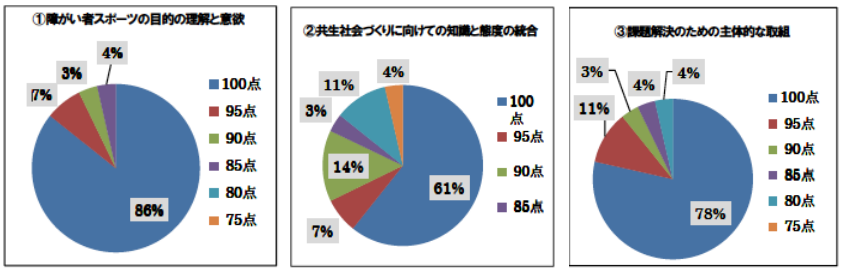
6 成果

(1) 第３学年での実践

①障がい者スポーツの目的の理解と意欲、②共生社会づくりに向けての知識と態度の統合、③課題解決のための主体的な取組について、下のような結果が得られた。また、生徒の感想で最も多かったのが、「全ての人が幸せに暮らせる社会をつくっていくためには、これからも考え続けていかなければならない、これからも関わっていきたい」というものだった。生徒の視野の広がり、変容、障がい者スポーツへの関心の高まりが感じられた。

(2) 第２学年での実践

障がいの有無に関わらずスポーツの多様な楽しみ方を共有する心、人間同士が歩み寄ることで障がいをなくしていけるという発見、サポーターつまり自分たちの役割の認識といった意識が高まった。



7 実践において工夫した点（特色）

○複数の学年で異なる視点からアプローチをしてみることで、よりよい方法を探ること。

○地域で盛んに取り組んでいる軽スポーツの活動と、共生の視点を取り入れた障がい者スポーツの実践により、将来的に障がい者スポーツを一つのスポーツとして発信していくことを考えた。

8 課題等

○計画的・系統的に学校教育の中に組み込んでいけるよう、総合的な学習の時間の年間計画の福祉体験学習の中に入れていきたい。

○生徒にとって有効な学びとなるよう、他の体験学習や他教科等の学びとの関連を考え、適切な時期・内容を長期的な視点で吟味する。

実践事例９　宿毛市立山奈小学校（高知県）

1 実践のテーマ

盲導犬を通した国語と総合的な学習の教科横断的な学習

2 対象者

第３学年　20 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：国語
　その他：盲導犬との出会い

4 目標（ねらい）

　国語の学習（盲導犬の訓練）において、盲導犬は目の不自由な人が安全に歩けるように、目の代わりになって助ける犬であることを知る。また、実際、地域で盲導犬と暮らしている方に話を聞き、盲導犬との出会いから訓練等の大変さを知ることで、障がい者についての理解を深め、温かい心で共に生きることの大切さを感じ取らせる。

5 取組内容

　盲導犬と暮らす方を講師に、盲導犬との出会いから、盲動犬と共に厳しい訓練をしながら、絆を深め、目となり共に暮らす嬉しさや大変さについて理解を深めることができた。障がい者について理解し、これからの生活にどう生かしていくか考えるよい機会となった。





6 成果

国語で盲導犬の訓練の学習をしていたことにより、理解できた内容や知らなかった内容等が学習できた。感想からも、障がい者の大変さや努力等を考えさせられたようである。この学習を通して障がい者理解を深めるきっかけとなった。

7 実践において工夫した点（特色）

最近では盲導犬と一緒ではなく、山戸さんお一人での話になるので、分かりやすく、また、自分で作った歌などを聞かせてもらいながら、障がい者理解を深めることができた。

8 課題等

盲導犬と共に話を聞くことができていないので、盲導犬がいかに人に寄り添いながら生活をしているかがわかりにくくなったように思う。犬も老犬になることを知らせ、盲導犬としての役目を終えたとき、人はどのようにして今後生きていくか考えることができただろうか。

実践事例 10　宿毛市立宿毛中学校（高知県）

1 実践のテーマ

障害者理解プロジェクト

2 対象者

第 1・2 学年　113 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育
その他：総合的な学習の時間、福祉体験学習

4 目標（ねらい）

高齢者や障害のある人たちと接し、共に生きていくなかで、その人たちの立場に立って共感できる態度を養う。また、自ら進んで社会に貢献できる態度を養う。

5 取組内容

（1）あすチャレ！ School in KOCHI（第 1 学年）

ウィルチェアラグビーの講師のデモンストレーションの後に、試合を実施した。車椅子を操作する難しさを知る中で、ウィルチェアラグビーが障害者のためだけの特別なスポーツという考えがなくなった。また、その後のディスカッションでは講師の人柄や、前向きな考え方に触れる中で、二人の講師に対する考えが「可哀そう」といったマイナスイメージから、「尊敬や憧れ」といったプラスイメージに変化した。





(2) 福祉体験学習（第２学年）

宿毛市内の 14 ヵ所の障害者、高齢者支援施設で福祉体験学習を実施した。目的は、「体験を通して、生徒に福祉の意義や役割について考えさせる」「生徒それぞれが相手の立場で物事を考え、自ら進んで社会に貢献できる実践力を身につけさせる」ことにある。

生徒はそれぞれの施設で、職員と同じように介護や支援などを経験させてもらった。最初は何をやっていいのか分からず職員の指示を待つ生徒の姿が目立ったが、経験する中で何をすれば良いのか自ら考え、判断して取り組むようになった。また、高齢者が何度も同じ内容を聞き返しても、丁寧に受け答える生徒の姿が見られるようになった。この学習を通して、生徒の人間の尊厳に対する価値観が高揚したことが一番の成果であった。





6 成果

○障害者福祉体験では、障害者、高齢者に対する偏見が少なくなり、実際の生活で生かせる体験ができた。

○あすチャレでは、車椅子を操作する難しさを知る中でウィルチェアラグビーが障害者しかやらない特別なスポーツといった考えがなくなった。

7 実践において工夫した点（特色）

長年、宿毛中学校がこの学習を実施してきた積み重ねがあり、各福祉施設も受け入れ態勢ができていた。

8 課題等

○ 2020 東京オリンピック・パラリンピック終了後に、同じような課題を今回とは違った切り口でどう生徒に投げかけるか。（国や県の事業がなくなった時）

○講師や教室の内容など連絡調整が直前にならないと分からないこと。

実践事例 11　長崎市立香焼小学校（長崎県）

1 実践のテーマ

年間を通したパラリンピック教育

2 対象者

全校児童　167 名、第 6 学年　40 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育
　行事名：香焼小フェスタ・遊びリンピック
　その他：道徳、わくわくハッスルタイム
【地域における活動】
　イベント名：パラリンピアンによる講演会

4 目標（ねらい）

○オリンピック・パラリンピックを契機として、スポーツの価値や共生社会の大切さを知り、世界の平和を願う心情を育てる。
○ハンディを抱えながら、夢の実現に向けて努力するパラリンピアンの講話を聴くことにより、自分も粘り強くやり遂げようとする意欲を高める。

5 取組内容

（1）教科指導
　①道徳にて、パラリンピック教材「I'mPOSSIBLE」を用いた授業（6 月）
　②体育（6 年生）にて、バレーボールの授業の中でシッティングバレーボールの授業（11 月）
（2）「香焼小フェスタ」における遊びリンピックの活動にて、シッティングバレーボール・ボッチャの体験（全児童）（10 月）
（3）「わくわくハッスルタイム（朝 10 分間の全校体育）」にて、パラリンピック全般に関する紹介（全 4 回）（12 月～ 1 月）
（4）パラアスリート（芦田創選手）による講演「より遠くへ」の開催と振り返り（1 月）





6 成果

活動前と活動後のアンケート回答に次のような変化が見られた。

質問	とても思う・思う	質問	とても思う・思う
オリンピックに興味がありますか	76.6%→80.3%	きまりやルールを守って行動すること、生活することができますか	87.3%→89.0%
パラリンピックに興味がありますか	65.9%→77.0%	社会や人のために役に立つことをしたいと思いますか	90.4%→91.2%
オリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか	62.8%→72.6%	お年寄りや障害のある方と交流したいと思いますか	65.9%→81.4%
パラリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか	61.7%→72.6%	日本や世界の文化を知りたいと思いますか	85.1%→85.7%
オリパライベントに参加したいと思いますか	63.8%→67.1%	運動やスポーツをしたい、見たいと思いますか	89.3%→90.1%

全ての質問項目において、とても思う・思うと回答する児童が増えた。この事業の目的等を特別に説明せずに実施した結果であることから、児童にオリンピック・パラリンピックに対する興味・関心だけでなく、人権意識や共生社会に対する感覚も養われたことが窺える。

7 実践において工夫した点（特色）

○年間を通した啓発活動を行う

3学期にパラアスリートの講演があることが事前に決定していたため、年間を通して、スポーツの意義や価値、オリンピックと平和との関連について触れるようにし、1学期から継続的に啓発活動を行った。特にパラスポーツの体験については、体育の授業や行事の一環として自然な形で体験できるようにした。

○パラリンピック教育教材の活用

「I'mPOSSIBLE」は非常に扱いやすく、全ての取組において積極的に活用した。特に効果的だと感じたのは、道徳の授業参観であった。アスリートとしての選手の気持ち、障害者としての気持ち、そして一人の人間としての気持ちを並行して扱うことが出来る有意義な題材として、今後も継続的に活用していきたい。また、授業参観では保護者も授業の内容を聞くことになるため、本教材を授業参観で扱うことは家庭でもオリンピック・パラリンピックの話題に触れる良い機会となると思われる。

8 課題等

○パラスポーツ体験のハードル

今回、ボッチャの体験を行ったが、用具を十分に揃えることができなかったため、本来の競技とは少し異なるゲーム性になってしまった。代用できる用具の紹介や用具の作り方などの情報を集める必要性を感じた。

○「I'mPOSSIBLE」の活用拡大

担当者として本教材の魅力は十分に理解し、他職員へも利用を呼びかけたが、日々の業務に追われて全校での活用までには至らなかったことが残念だった。

実践事例 12　熊本県立鹿本高等学校（熊本県）

1 実践のテーマ

視覚障害者マラソンの伴走体験を通したパラリンピック教育

2 対象者

全校生徒　637 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育
　行事名：チャレンジ大会事前指導オリ・パラ講演会

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピック選手の体験、エピソード、大会を支える仕組みなどを直接聞く機会を通して、スポーツの価値、参加国、地域の文化、言語、共生社会、持続可能な社会、また、我が国・地域の伝統・課題について考える機会とする。

5 取組内容

（1）チャレンジ大会（20㎞走大会）の事前学習
　①堀内規生さん（視覚障害者マラソン伴走者）のリオデジャネイロオリンピックでの体験談
　②走る意義や喜び、長距離を走るに当たっての注意事項や当日心がけることなどについて理解する。
　③視覚障害者の伴走の方法について理解する。
　　・コミュニケーションの取り方
　　・ロープの使い方
　　・走り方

（2）チャレンジ大会当日デモンストレーション
　①堀内さんのフルマラソンの自己ベストタイム（2 時間 40 分）の走りを体験
　②堀内さんと男子運動部員 3 名（駅伝部・サッカー部・バスケット部）がフルマラソンの走りを体験。

（3）視覚障害者マラソンの疑似体験と伴走の体験学習
　① 10㎞程度のコース内にて男女各 1 組の生徒が疑似体験を行う。
　②約 2㎞程度、アイマスクを装着し視覚障害者役と伴走役を交互に体験





6 成果

○これまで障害者スポーツに対して理解が薄かった生徒たちであったが、講演だけではなく、体験を通してより身近なものに感じられたようである。

○今回の講演会では講師の堀内氏も市民ランナーとして 2 時間 40 分 54 秒という記録を持っておられ、実際に一緒になって走る機会が得られたことで、長距離走が苦手な生徒にとっても、高校生時代の授業としての長距離走で終わらず、卒業後の生涯スポーツとしてランニングに取り組む意識ができたのではないかと思われる。いつの日かランニングをやってみようと考えてくれることを期待したい。また、得意な生徒にとっては伴走者という新たな視点で長距離走を意識できるようになったようである。自分のためだけではなく人のために自分の特技が生かせそうだというコメントが得られたことは今回の収穫ではなかったかと思う。

7 実践において工夫した点（特色）

○できるだけ生徒がイメージしやすいように、体験ができるように心がけて計画した。

○話を聞くだけではなく、身近な生徒の実技（堀内氏とのランニング）も取り入れながら、生徒たちの興味を誘うような企画を考えた。

8 課題等

今回は視覚障害者マラソンの伴走者である堀内氏に来校していただき、講演を行っていただいた。講師がお一人であったため、体験する生徒も限られた人数しか実施ができなかった。堀内氏の仲間の皆さんや関係機関との連携を図り、より多くの生徒が体験でき、多くのことを感じてもらえるように計画することが重要であると感じた。

実践事例 13　静岡市立梅ケ島小中学校（静岡市）

1 実践のテーマ

パラリンピック教育用教材「I'mPOSSIBLE」の活用とパラスポーツ体験

2 対象者

全学年　23 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：道徳

4 目標（ねらい）

　パラアスリートとの交流を通して、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、広い心をもって他者から謙虚に学び、自らを高める。

5 取組内容

（1）事前学習
　①朝読書でのオリパラに関する読書
　②国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」を
　　活用した道徳の授業



（2）パラバドミントンの体験
　　パラバドミントン選手の指導によるパラバドミントン体験

（3）事後学習
　①感想の記入
　②派遣選手、パラバドミントン競技の応援









6 成果

○小学生の児童にとっては、車いすで生活している方に対して、接しやすくなった。
○初めてパラバドミントンの競技に挑戦し、上手にできなかったことを通して、その難しさを実感したり、選手に対して「すごい」という尊敬とあこがれの気持ちをもったりすることができた。
○自分の将来の夢に対して、改めて強い思いを抱くきっかけとなった。
○中学部の生徒にとっては、パラバドミントン選手の競技力を実際に体験することによって、どんな境遇や環境でも、本気で取り組むことの尊さ、価値に気付くことができた。
○日常生活において、障がいをもつ方々に対しての見方を少しでも変えていこうとする気持ちをもつことができた。
○パラリンピックの競技にも注目し、応援したいという気持ちをもつことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○小学生と中学生が一緒に講演を聞き、体験をすることによって、車いすへの乗り方を指導された中学生が、小学生に教えてあげたり手伝ったりしている様子が見られた。
○バドミントン部の生徒とパラアスリートが本気でゲームを行うことにより、パラバドミントンの競技力の高さを実感することができた。

8 課題等

○当初の実施希望日を 10 月～ 11 月としていたが、パラアスリートの大会期間中等であったため実現せず、実施が 1 月下旬となってしまった。たいへん寒い体育館の中、インフルエンザの流行もあり、児童生徒、パラアスリートへの健康に気を遣うこととなった。
○講演のテーマや内容についての事前の連絡調整をして、綿密なタイムスケジュールを組んでおきたかった。
○今後も、第４学年総合、福祉教育とパラリンピック体験等を関連づけることで、双方の理解の充実を図りたい。学習を通して、子ども自身で考える「わたしの」パラリンピックや福祉のあり方を見つめる機会としていきたい。

実践事例 14　北九州市立曽根中学校（北九州市）

1 実践のテーマ

パラ・パワーリフティング学習および国際大会の観戦

2 対象者

全校生徒　627 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育
　その他：パラ・パワーリフティング体験会

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピックの歴史や意義、実施競技等の学習やパラ・パワーリフティングの講演会等の体験学習を通して、スポーツの価値や効果について理解するとともに、国際的な視野をもって世界の平和に気づき、そのために社会に貢献しようという思いを抱かせる。

5 取組内容

（1）パラ・パワーリフティング講演会
　パラ・パワーリフティングの日本記録保持者である城隆志選手にお越しいただき、講演、実演、体験、質疑応答などを行った。城選手が競技を通じて得た経験・教訓を交えて競技の魅力やその醍醐味について講話をしていただいた。

（2）アジア＆オセアニア大会の応援
　「2018 北九州ワールドパラ・パワーリフティング アジア＆オセアニアオープン選手権大会」が北九州芸術劇場で開催された。この大会は日本で初めて開催されるパラ・パワーリフティングの国際大会であり、東京パラリンピックの選考をかねた重要な大会である。この大会に城隆志選手が出場するということもあり、有志を募り大会応援に参加し、生徒がデザインした横断幕を





持って熱の入った応援を行った。日曜日の夜の開催であったため、有志というかたちでの応援となったが、後日、学校で報告する機会をもつことで、感動の共有を図った。

6 成果

実際に国際大会で活躍している城選手に講話していただいた。障がいがある方が思っていること、生活をする上で大変なこと、何より絶望の淵から這い上がっていくリアルな体験を当事者から聞くことで、「自分にできることは何があるのか」、「困っている方がいたらどのように行動するか」など生徒一人ひとりが考えさせられるすばらしい講話であった。また、実際に力自慢の生徒や先生が一生懸命にバーベルを持ち上げるのを見たり、そのバーベルを軽々と城選手が持ち上げるのを見たりして、その姿に感動し、今までやってきた選手の努力に尊敬の念を抱いた。さらに、大会の応援に参加し、世界のレベルの高さに驚愕した。高い壁に挑戦する城選手を全力で応援し、さらにパラ・パワーリフティングやパラリンピックへの興味・関心を高めた。そして、今の自分に何ができるのか、ユニバーサルデザインやバリアフリーに対する興味・関心の向上など、生徒たちの心の変化が感じられた。

7 実践において工夫した点（特色）

「事前学習⇒体験活動⇒大会応援⇒新聞作成」という生徒の思いを大切にした学習活動を設定した。

○オリンピック・パラリンピックの意義や歴史を生徒に理解させるために事前学習を重点的に行った。具体的には、「自作のパワーポイント教材」や「東京2020教育プログラム I'mPOSSIBLE」を活用して生徒の理解度の向上を図るとともに、興味や関心を抱かせる工夫を行った。

内容は以下の６点である。

①オリンピックとは何か？パラリンピックとは何か？　②オリンピック・パラリンピックの歴史　③世界選手権、世界大会などのスポーツ大会との違い　④オリンピズムについて　⑤する、見る、支える、学ぶなど、多様な関わりがある　⑥東京で行われることのすごさ

○まとめとして、学習の跡を新聞で表現する学習活動を設定した。作成した新聞は、体育館にオリ・パラ教育ブースを設け、新聞の掲示を行っている。

全体を通して、生徒の「何をどのように学ぶのか」がわかるように心がけた。また、「何をどのように学んだのか」生徒たちの心に何が残ったのかを形として残るよう、これからのオリンピック・パラリンピック教育に役立てることができるように意識して学習を進めた。

8 課題等

○主として、保健体育科の学習としての実践であったが、総合的な学習の時間や他教科との関連を図る必要がある。

○実施はしたが評価段階で甘さがあった。

実践事例１　登別市立幌別中学校（北海道）

1 実践のテーマ

ホストタウン事業を活用した異文化理解と多様性の尊重

2 対象者

第１学年　62 名、第２学年　60 名、第３学年　74 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：学校祭
　その他：道徳、総合的な学習の時間
【地域における活動】
　行事名：デンマーク王国駐日大使講演会

4 目標（ねらい）

○オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高め、スポーツがもつ価値への理解を深める。
○異文化理解の下、国際的な視野をもつとともに、日本の伝統や郷土のよさを知る。
○多様性を尊重し、誰もが平等に、安心して生活できる共生社会を構築しようする態度を育成する。

5 取組内容

（1）駐日デンマーク大使フレディ・スヴェイネ氏の講演会
　本市のオリ・パラホストタウン事業の一つとして、本校体育館にて駐日デンマーク大使であるスヴェイネ氏を招き、「デンマーク王国の文化とスポーツ」を演題に講演会を行った。生徒は、デンマーク王国と本市の交流の歴史やデンマークで盛んなスポーツ等、デンマーク王国の文化やスポーツについて理解を深めた。





日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

(2) オリ・パラ、異文化理解を深める校内掲示活動の推進

学校祭の装飾活動の一環として、オリンピックの歴史や意義、世界の多様性や異文化の理解の一つとして、「世界遺産」、「世界の絶滅危惧種」、「世界の給食」などについて調べ学習を行い、まとめたものを学校祭で掲示した。また、生徒会の活動として、パラリンピックの意味、競技の特徴や使う道具などについて調べたものを校内に掲示し、パラリンピックへの理解を深めた。





6 成果

○事前、事後のアンケート集計結果を比較すると、ほとんどの項目で、数値が上昇し、オリンピック・パラリンピックへの興味・関心が高まった。
○生徒の自己評価の結果から「オリンピックやパラリンピックにボランティアや応援で参加したい。またイベントなどにも参加したい」と考える生徒が増加した。
○生徒の自己評価の結果から「決まりやルールを守る意識が高まり、社会や人のために役立つことをしたい」と思う生徒が増加した。
○駐日大使の講演会を通して、「オリンピックでは日本だけでなくデンマーク王国も応援したい」と思うなど、デンマーク王国への興味・関心が高まった。

7 実践において工夫した点（特色）

○本市のホストタウン事業との連携を活用して取り組んだ。
○イベント的な活動より生徒の日常的な活動を重視し、オリンピック・パラリンピックに対する理解を深めることをねらいに取り組んだ。

8 課題等

今年度は、お年寄りや障がいのある方との交流の場面が少なかったので、次年度は「共生」の視点から、お年寄りや障がいのある方との交流を充実させるとともに、パラリンピアンの話を聞く場面を設定したい。

実践事例２　郡山市立白岩小学校（福島県）

1 実践のテーマ

ホストタウン（オランダ）との交流

2 対象者

全校児童　36 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：生活（第１学年）、社会（第３～６学年）
　行事名：学習発表会「白岩フェスティバル」
　その他：総合的な学習の時間（第３～６学年）

4 目標（ねらい）

　他の国や障がいがある方々と交流をもつことで、多様性を尊重する視点を持ち、他者への共感や思いやりの心情を育てる。
＜テーマ＞
　「わたしたちのオリンピック・パラリンピック in Tokyo」
　～やってみよう　つながろう～

5 取組内容

「ホスト国 オランダのみなさんにオリンピック・パラリンピックを見に来てもらおう。」

【調べる】
　〇安積疏水におけるファン・ドールンの功績
　〇姉妹都市（オランダ王国ブルメン市について）
　〇オランダの様子について（国土・生活・スポーツ）

【話をきく】
　「おしえて ヨーストさん！（白岩フェスティバル）」
　郡山市国際交流員　ヨースト クラルト 氏
　　〇郡山市との結びつき
　　〇オランダの国土
　　〇人々の生活や文化
　　〇学校生活



日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

○スポーツ（スケート、自転車）

【つながる】

（1）「ホストタウン交流事業」＜協力：郡山市国際政策課＞

○ブルメン市内小学校との交流（1 月～ 3 月）

○オリンピック・パラリンピックポスター制作・送付

○ビデオレターメッセージの交換

○学校ホームページでの情報発信



（2）「家庭・地域とつながる」

オリパラ教育の取り組みを家庭と地域に発信

○白岩フェスティバルの機会を生かす

○学校だよりやホームページで情報発信

○学校の玄関ホールにオリンピック・パラリンピックコーナーを設置



6 成果

ホストタウンとの交流活動を通して、外国の国土や文化、生活習慣について理解を深め、多様性を認め、尊重しようとする気持ちが高まった。

7 実践において工夫した点（特色）

2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを児童にとって貴重な機会ととらえ、新たなスポーツとの出会いや、オリンピック・パラリンピックに関わる人々および他国の人々とのつながりを通して体験的に学べるように配慮した。また、学校が起点となり、地域のホストタウンとしての気運を高められるよう、家庭・地域への情報発信の機会を設定した。

8 課題等

○講師等の確保や交流先とのつながりについては、学校単独では困難であり、今後も県・市の支援が必要である。

○児童の関心・意欲が高まっていることから単年度ではなく、オリンピック開催年まで継続した取り組みとしたいが、予算の面で見通しが持てない状況にある。

実践事例３　境町立長田小学校（茨城県）

1 実践のテーマ

ホストタウン（アルゼンチン）との交流

2 対象者

全校児童　261 名、保護者、地域の方

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：ケーナ演奏会
　　アルゼンチンの日の集い・長田ふれあいフェスティバル
【地域における活動】
　イベント名：日本アルゼンチン協会親善サッカーフェスティバル

4 目標（ねらい）

　アルゼンチン大使館やアルゼンチン協会の方々との交流を通して、アルゼンチンの文化・伝統・言語等への理解を深めるとともに、外国人の人々と意欲的に交流しようとする態度を育てる。

5 取組内容

（1）ケーナ演奏会
　アルゼンチン大使館の紹介によりケーナ演奏者を招いて演奏会を行った。当日はアルゼンチン人のケーナ奏者と日本人のギター奏者の演奏を全校児童で鑑賞し、中南米の楽器体験も行った。
期 日：平成 30 年 10 月 24 日（水）
内 容：フォルクローレ演奏会（ケーナ、シーク、チャランゴ演奏）







(2) アルゼンチンの日の集い・長田ふれあいフェスティバル

今年度で 30 回目を迎える「アルゼンチンの日の集い」だが、文化祭である「長田フェスティバル」と組み合わせて行っている。アルゼンチン大使や公使をはじめ、多くのアルゼンチン大使館関係者が来校した。

期 日：平成 30 年 10 月 27 日（土）

内 容：

【午前】「アルゼンチンの日の集い」（体育館）

〇アルゼンチン大使や来賓の方々のお話

〇プレゼント贈呈 (大使からもプレゼントがあった)

〇歌の贈り物と全校合唱

〇派遣事業の報告会 等々

【給食】大使や参加者と 4 年生による交流給食

【午後】「長田ふれあいフェスティバル」（各教室）

〇各教室での催し物に大使も参加して児童と一緒に活動した。







(3) 日本アルゼンチン協会親善サッカーフェスティバル

日亜協会主催により、隔年で行われる大会である。アルゼンチン大使館や日本アルゼンチン協会と関わりのサッカーチームが参加をし、低学年の部、高学年の部、大人の部が行われる。

期 日：平成 30 年 10 月 28 日（日）

場 所：三菱養和サッカー場 (東京都巣鴨)

内 容：長田小学校、BOCA ジュニアズ、オースティン SS の 3 チームが参加し、それぞれ低学年の部、高学年の部、大人の部に分かれ、リーグ戦方式で行われた。長田小では、数年前より長田小単独のサッカー少年団が無くなったため、児童と保護者に希望を募っての参加となった。アルゼンチン大使等も応援にみえ、楽しい交流会ができた。







6 成果

本校の児童は、長く続いているアルゼンチンとの交流を当たり前のものとして捉えており、また、誇りにも感じている。アルゼンチンとの交流の部屋や全校で練習しているアルゼンチンの歌『サンバ・デ・ミ・エスペランサ』、朝の放送でのスペイン語の挨拶などもあり、学校生活の一部となっている。今年度の取組も、国際交流の一端として児童たちの心に残るものとなった。さらにオリンピック・パラリンピックに向けてモチベーションを高め、ボランティアの心や国際理解の掲揚に努めていきたい。

7 実践において工夫した点（特色）

（1）児童の主体的な活動の支援
○リーダーや係として活躍できる場の設定と事前指導の充実
○学級や学年、グループ単位での活動の工夫
○効率的な行事計画や実施計画の作成と改善

（2）大使館や町、外部機関との連携
○大使館職員（大使、公使、通訳）との連絡調整
○町（町長、教育委員会）との連絡調整
○外部機関（大使館、協会、講師）との連絡調整
○保護者との連携（情報発信、PTA との協力）

8 課題等

（1）学習効果を高めるために
○効率的・効果的な行事計画、行事の精選
○事前事後指導の充実と能率化
○児童の意欲を高めるための手立て

（2）大使館や町、外部機関との連携
○連絡や協議の手段や時間の確保
○予定にない行事の依頼や変更に対する臨機応変な対応
○勤務時間外の打合せや行事の対応等

実践事例４　埼玉県立上尾高等学校（埼玉県）

① 実践のテーマ

地理の授業と関連づけた世界のスポーツ文化の学習

② 対象者

商業科３学年　124 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　その他：地理

④ 目標（ねらい）

　世界各国の文化やスポーツを調査し、プレゼンテーションとして発表することで、生徒たちが様々な「知識」を身に付けるだけでなく、お互いの「思考力・判断力・表現力」を伸ばす機会とすることがねらいである。また、調査活動・プレゼンテーションを通してその背景にある世界各国の風土や歴史を学び、スポーツの魅力発見や国際理解の深化を目指す。

⑤ 取組内容

○各クラス６班（各班６～７名）に分かれ、話し合いで調査する国を決定する。
○それぞれの国の基本情報・民族・言語・宗教・文化・スポーツ等を調査し、プレゼンテーション資料としてまとめる。（主に図書館を利用）
○各班（6 か国）によるプレゼンテーション（5 分間×６班）を実施（各教室）
○各班のプレゼンテーションを４項目で評価（※自分の所属する班を除く）
○授業者による内容等の補足を行う。







6 成果

○座学ではなく調査・プレゼンテーションを自ら行うことで、生徒一人ひとりの知識の「定着」が促された。
○生徒たちにとって身近な「スポーツ」を切り口のひとつとすることで、楽しみながら学ぶ様子が見受けられた。
○もともと持ち合わせていた世界各国のイメージが、調査・プレゼンテーションを行うことで変化したと話した生徒もおり、国際理解の深化を図ることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○各クラス２回のプレゼンテーションを実施し、12 か国（6 か国× 2）について学ぶことができた。
○「スポーツ」とその国の風土や歴史との関わりを深く学ぶことができた。
○プレゼンテーション形式により、表現することの難しさや楽しさを学ぶことができた。

8 課題等

○一部の班はパワーポイントを利用したプレゼンテーションを実施したが、現状では校内における ICT 環境が充実しているとは言えないため、すべての班がそれらを使用したプレゼンテーションを行うことができなかった。
○紙芝居や手作り資料を一生懸命に作成したり、演劇の要素を交えたりするなど、プレゼンテーションの工夫が多々見られたため、今後もパワーポイントに固執しないプレゼンテーションに取り組んでもらいたい。

実践事例５　千葉県立矢切特別支援学校（千葉県）

① 実践のテーマ

掲示板を活用したグローバルプロジェクト

② 対象者

全校児童生徒　123 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：生活
　その他：道徳、総合的な学習の時間、給食

④ 目標（ねらい）

＜やってみよう 知ろう 楽しもうオリンピック・パラリンピック＞
　自国や他国の関係に関心を持ち、異文化への理解の促進や交流に取り組み、自国や他国の文化の歴史について学ぼうとする気持ちを育てる。

⑤ 取組内容

(1) オリパラ掲示板
　校内１階の児童生徒が多く通る場所に本校のオリンピック・パラリンピックに関する取り組みについて掲示するスペースを設けた。





(2) オリパラ給食
　５月から２月まで月１回、各学部でグローバル教育として学習した国の料理をオリパラ給食として味わった。高等部の給食委員会は、オリパラ給食の紹介物の作成・掲示、その国の情報や音楽について放送した。また、栄養教諭と連携し、オリパラ給食で出る国の食の歴史や文化、メニューについて説明した「オリパラ給食だより」を配布し、朝の会等で事前学習を行った。またメイン料理は全校で投票を行い、１番人気のメニューを食べた。





6 成果

(1) オリパラ掲示板

○大きな世界地図はインパクトがあり、多くの児童生徒が興味関心をもって見ていた。

○校内各所にオリンピック・パラリンピックに関する掲示をしたことで、児童生徒からオリンピック・パラリンピックの話題が出ることが増え、他学部の学習を知ることができた。

(2) オリパラ給食

○給食を通して他の国について興味をもつ良いきっかけとなった。

○掲示物やオリパラ給食について話題にする機会を増やしたことで、どこの国の料理を食べているか答えられる児童生徒が徐々に増え、他国の食文化の理解に繋げることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

(1) オリパラ掲示板

○主な活動内容を１ヵ所にまとめて掲示することで、他学部がどのような取り組みをしているか、全校でどのような活動をしているかを共有できるようにした。

(2) オリパラ給食

○食堂前の廊下に月ごとのオリパラに関するメニューや国紹介を掲示した。

○食堂内のホワイトボードに国旗、首都、人口、挨拶や有名なスポーツ、よく食べられる食材を書いたポスターを掲示した。

8 課題等

(1) オリパラ掲示板

同じ内容の掲示物を長く掲示することがあった。各学部の掲示に良い作品や取り組みの様子が多くあったため、全校が見る大きい掲示板をもっと活用するように促すべきであった。

(2) オリパラ給食

毎月のこととなると、栄養教諭、調理員の方が準備する時間を確保する必要がある。

実践事例６　石川県立鶴来高等学校（石川県）

1 実践のテーマ

地域文化の学習を通したまちづくりへの貢献

2 対象者

地域探究会

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：地域探究会

4 目標（ねらい）

　鶴来の歴史、文化、伝統、産業などを、生徒の目線で知識として再確認し、将来へ伝えていくための活動を通じてまちづくりに貢献する。

5 取組内容

（1）鶴来探訪～醸造の町鶴来～（菊姫酒造、高野酢造）



（2）ほうらい祭り、学校公開における「語り部講座」



日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

(3) 牛首紬について知ろう（白山工房）



6 成果

自分たちの通っている学校がある地域の歴史や文化、伝統や産業についての学習を通して、地域への理解が深まった。また、地域の祭りや学校公開における語り部発表を通して、地域住民と交流し、まちづくりに貢献することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○年度ごとに地域のいろいろな産業について学習し、幅広く学んでいる。
○語り部講座を通して、地域住民と交流を深めている。

8 課題等

活動に参加している生徒が少ないので、より多くの参加を働きかけたい。

実践事例７　郡上市立明宝小学校（岐阜県）

① 実践のテーマ

ホストタウンと関連づけた国際交流

② 対象者

全校児童　60 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：生活
　行事名：朝活動の時間、全校集会
　その他：総合的な学習の時間

④ 目標（ねらい）

　ホストタウンであるコロンビア共和国の言葉や文化などを知ることを通して、国際交流の意欲を高め、積極的にコミュニケーションすることができると共に、日本や郡上の文化の良さについて、改めて感じ取ることができるようにする。また、コロンビア女子ユースラグビー選手との交流を通して、おもてなしの気持ちを表現するとともに、2020 東京オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高めることができるようにする。

⑤ 取組内容

（1）事前学習
　①オリエンテーション
　　コロンビア女子ユースラグビー選手たちと交流活動を行うことの目的や学習の見通し、そしてコロンビアに関する基礎知識の伝達
　②ウェルカムボードの作成
　　縦割り班（異学年合同）ごとに、来校する選手一人一人のウェルカムボードを作成
　③国旗づくり
　　縦割り班（異学年合同）ごとに、コロンビアの国旗を作成
　④コロンビアを知ろうクイズ
　　お昼の放送で、コロンビアの挨拶等のスペイン語やコロンビアの名産や習慣等に関するクイズを実施

（2）交流会（2018 年 9 月 14 日）
　①給食を通した交流

各学級で３～４名の選手を招待し、給食を一緒に食べながら、教室にあるものや日々の小学校での生活について英語と身振り手振りでコミュニケーション

②校内清掃を通した交流

身振り手振りで児童が選手に方法を教えながら校内清掃を一緒に実施

③郡上踊りを通した交流

郡上の伝統的な踊り「春駒」を一緒に踊る

④日本の伝統的な遊びやコロンビアのダンスを通した交流

縦割り班（異学年合同）ごとに、おりがみ、お手玉、だるまさんが転んだ、けん玉、はないちもんめを行ったり、コロンビアのダンスを一緒に踊る





6 成果

郡上市がコロンビアのホストタウンになったこともあり、児童にとって触れ合えるよい機会となった。また、準備を通しておもてなしの心をもつことができ、実際に来校してくださった選手たちにその思いが伝わり大変喜んでくださった。これらの活動を通して、コロンビアやラグビーが少し身近に感じられるようになった。また、わかってほしいという気持ちで接すれば、言語が異なる相手でもコミュニケーションが取れることがわかり、国際交流に対する抵抗がなくなった。

7 実践において工夫した点（特色）

担当者と細かく打ち合わせができたことで安心して取り組むことができた。また、コロンビアの選手達の出場する試合が休日で参観できなかったが、全校集会でビデオ映像を見せることで 2020 東京オリンピックへの関心も高まった。

8 課題等

児童は交流が始めてということもあり、文化の違い等、心配な点が多くあり大変であった。また、児童にとってよい機会となったが、教育活動のどこに位置付けていくとよりよいのかを考えていく必要があると思った。

実践事例８　兵庫県立川西北陵高等学校（兵庫県）

① 実践のテーマ

インタビューを通した自己探求・自己表現

② 対象者

第１・２学年　550 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：卒業生によるグローバル講演会
　その他：総合的な学習の時間、学校設定科目「自己探究」「自己表現」

④ 目標（ねらい）

　オリンピックに３大会連続で出場した本校の卒業生を迎え、３度のオリンピック出場をはじめ、豊富な海外での経験や異文化との交流等について、プロのアナウンサーによるインタビュー形式で話を聴き、オリンピックだけでなく、異文化そして我が国・地域の文化について考える機会とする。

⑤ 取組内容

(1) ５月

　１年生の各クラスにおいて、インタビューの方法や注意点について学習する。２年生では、12 月の講演会のインタビュアーでもあるプロアナウンサー（卒業生）を招き、「インタビューの極意」というテーマの講話を聞く。



(2) ７・８月





日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

１年生全員がキャリア教育の一環として「自分より少し前を走り、自分の生き方を表現している職業人（社会人）に話を聴き、未来と現在の自分をつなげる」という目的でインタビューを行う「職業人インタビュー」を実施する。

(3) 11月

各クラスで、スポーツの価値やオリンピズム、国際理解、異文化理解について学習する。

(4) 12月

オリンピック選手とプロアナウンサーによるインタビュー形式の講演会



6 成果

講演会が生徒達にも好評で、オリンピックの興味・関心が高まっただけでなく、異文化そして我が国・地域文化について考える機会とするという目標について、十分に達成することができたと考える。

また、同じ学び舎で高校時代という時を過ごした先輩方（卒業生）のお話をじっくり聴かせてもらうことにより、今後の高校生活に前向きに取り組もうとする意欲や、自分たちにもできるのではないかという自己効力感が多くの生徒に芽生えたように思われた。

7 実践において工夫した点（特色）

まず、生徒がインタビューというものを経験した上で、プロのアナウンサーにインタビュアーとして関わっていただいた。講師は、本校の卒業生という身近な存在の方にお願いした。講師、インタビュアー、学校担当者の３者で事前に打ち合せを行い、内容を精査した。

8 課題等

今回実施した講演会の講師やインタビュアーは、生徒達にとって縁遠い存在ではなく、同じ学び舎で時を過ごした先輩（卒業生）であったため、生徒達に親近感を与えたり、興味を持たせることができたが、なかなかそのような存在の方は見つけにくい点や、適任が見つかったとしても、講師として講演会に来ていただくことが容易ではない点。

実践事例９　大阪市立加美東小学校（大阪市）

1 実践のテーマ

世界各国のお米料理を活用した異文化理解と多様性の尊重

2 対象者

第５学年　67 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：家庭

4 目標（ねらい）

○「米」を通じて世界にはさまざまな文化があることを実感できる。
○日本を含む、様々な諸外国の文化の良さ、違いを学び、異なる文化を認め合う態度を養う。

5 取組内容

＜事前学習＞書籍やインターネットを使い、外国の習慣、言語、気候などの文化を調べる。
(1) 外国のゲストティーチャーの方と挨拶をする。
　自分が担当する国の「こんにちは」の言い方を調べておき、挨拶・自己紹介をする。

(2) 各班に分かれて調理実習を行う。
①インタビューをしたり、作り方を教えてもらったりしてコミュニケーションをとりながら活動する。
②調理しながらインタビューし、分かったことや気が付いたことなどは、ワークシートに記録する。
③できあがった料理を喫食し、日本の料理との共通点や相違点などを考えながら食べる。
④気が付いたことや感じたことなどはワークシートに記入する。
⑤お礼の言葉を伝える。



6 成果

○「他の国の文化と自分の国の文化が違っても否定しない」といった意見があったり、食べ馴染みのなかった料理にも戸惑うことなく受け入れられたり、日本とは違うあいさつの仕方を受け入れたりと世界の料理や文化などを新しく知り、様々な国や地域の文化の良さ、違いを学び、異なる文化を認め合う態度を養うことができた。

○日本と世界の料理を比較したり、今まで自分が知っていた日本の料理と新しく知った世界の料理を組み合わせて、新たなものを生み出そうとしたりと異なる文化を受け入れながら、異なる文化を持った人たちとの協働による新しい価値を生み出そうとする態度を育てることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○事前には調べ学習、事後には新聞作りを行い、取組が深まるようにした。

○８か国のゲストティーチャーの方に来ていただき､８種類の米料理を作ったこと。

8 課題等

時間配分が難しく、実習前の準備が多くかかってしまったこと。

実践事例１　岩手県立花巻清風支援学校（岩手県）

1 実践のテーマ

特別支援学校におけるオリンピック教育

2 対象者

全校児童・生徒　220 名、教職員、PTA、地域関係者　80 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育、保健体育

4 目標（ねらい）

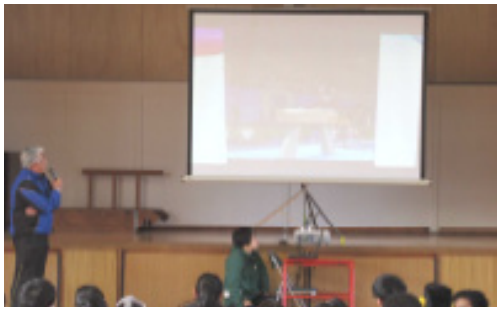
　オリンピアン・パラリンピアンによる授業をとおしてスポーツの楽しさやスポーツに取り組む姿勢（心構え、態度）について知り、仲間とともに主体的に取り組む態度や公徳心の育成・向上を図る。また、児童生徒、教職員、PTA、同窓会及び地域の関係者にとって、オリンピアン・パラリンピアンとの交流を励みとするとともに、共生社会に向けた理解推進の機会にする。

5 取組内容

（1）事前学習
　オリンピック・パラリンピックの歴史と目的、東京オリンピック・パラリンピックの日程等についての講義

（2）オリンピアンによる講演と実技指導
　オリンピアンの鹿島丈博さん（体操）による講演「オリンピックでの経験談と子どもたちに伝えたい大切なこと」と選抜児童生徒を対象とした実技指導「誰でもチャレンジできる簡単なマット運動」の取り組み

（3）事後指導
　事前学習や講演の内容の振り返り





スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成



6 成果

○オリンピックのメダリストから自分自身のスポーツとの出会いや興味を持ち始めたきっかけや多くの人に支えられてきたことに対する感謝の気持ち等、貴重なお話を聞くことができたこと、さらに直々にマット運動の指導を受けることにより、スポーツと運動に取り組む姿勢や興味・関心を持つ児童生徒が増えた。
○どんなことにも目標を持って取り組むことの大切さ、チャンスはどこにでも流れているが努力している人にしか見えないこと等、物事に取り組む姿勢を学ぶことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○児童生徒や来校者への啓発を図るために、廊下の掲示板にオリンピック・パラリンピックコーナーを設置し、関連記事や資料を作成して掲載した。
○オリンピック・パラリンピックの説明の前に、本校の生徒が参加している県障がい者スポーツ大会や全国障害者スポーツ大会の様子について、生徒自身から感想等を発表することで、スポーツ大会の内容について理解できるように取組を進めた。
○パラリンピックの正式競技であるボッチャを授業に取り入れ、パラリンピック競技についての興味・関心を高める取組を進めた。
○児童生徒の実態に合わせ、動画や写真を使いながら説明をすることを心掛けた。
○オリンピアンの指導の下、実際に指導を受ける場面を想定して児童生徒の興味・関心を高めることができるように配慮した。
○生徒からお礼のことばと手作り作業製品を記念品として贈り、感謝とエールの気持ちをこめて校歌を斉唱した。

8 課題等

○時間が限られており、講演の後の質疑応答の時間を確保することができなかった。
○児童生徒の実態に大きな差があるため、各レベルに応じた指導計画の立案に腐心した。
○自分の生活エリア以外のことに興味を持たない児童生徒に対して、どのようにスポーツの魅力を伝えること等の関わりを行っていけばよいのか。

実践事例２　登米市立北方小学校（宮城県）

1 実践のテーマ

VR ゴーグルを活用したオリンピック種目の体験

2 対象者

第４学年　35 名、第１～６学年　延べ 150 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：国語
　その他：総合的な学習の時間、学級活動、休み時間等の図書の貸出

4 目標（ねらい）

　VR ゴーグルを着用することで、子供たちがなかなか体験できないオリンピック競技種目について、オリンピアンの視点や音声によってバーチャルに体感し、オリンピック・パラリンピックへの関心をより高める。

5 取組内容

＜事前の学習＞
(1)「オリンピック・パラリンピックってなあに？」
　　書籍を通して、オリンピック・パラリンピックへの理解を深めたり、新たな疑問や関心をもったりした。

(2)「オリンピアンに会おう・話そう・ふれ合おう」
　　オリンピアンに実際に会って、話したり、競技を体験したりして、オリンピアンの生き方や考え方を間近で感じ取った。

＜事中の学習＞
「オリンピック選手になってみよう（VR 体験）」
　対象学年：第４～６学年
　実　　施：１月
　VR 体験をしたオリンピック種目
(1) スピードスケートの団体競技「パシュート」VR 映像
　　(https://www.youtube.com/watch?v=yH3L9dxIWJo を活用)



(2) カーリング女子の「スーパーショット」VR 映像
(https://www.youtube.com/watch?v=k4f8j5SLQzc を活用)



(3) スキージャンプの VR 映像
(https://www.youtube.com/watch?v=e_GOdo9_DIY を活用)



(4) スキーハーフパイプ VR 映像
(https://www.youtube.com/watch?v=rG9_MGb9D5Q を活用)



VR 体験の様子

○それぞれの競技について、どのような競技なのかを確認したが、ほぼ全員が事前の図書による学習やメディアを通して分かっていた。

○４つの競技の VR 映像に合わせ、４グループに分かれて VR 体験を行った。

○一通り体験した後に、さらに VR 体験したい競技の VR 映像を各自選択して視聴した。



＜事後の学習＞

「VR 体験を振り返ろう」

VR 体験後に、感想カードへの記入を行った。



○児童の感想の一部は以下のとおりとなった。

児童 C「全部楽しかったです。カーリングは、自分がストーンになって打たれたみたいでした。スキーのジャンプは、思わず叫んでしまいました。スキーのハーフパイプは、ドキドキしました。そして、くらくらしました。でも、とてもおもしろかったです。」

児童 M「スキージャンプの時、自分も思わずジャンプしてしまいました。刺激的でした。後ろを向いて友達がいると思ったけど、VR だったのでジャンプ台でした。スキーのジャンプで、本当に飛べたようでよかったです。」

6 成果

○児童の感想カードのいたるところに「ハーフパイプを体験した時に ･･･」「ジャンプをした時に ･･･」などといった自分が実際に体験したような文章表現があった。このことから、VR ゴーグルの装着によるバーチャルな競技体験は、疑似体験にも関わらず、オリンピアンになったような感覚を大いに児童へ与えたと言

える。
○今回のオリンピック競技を実際に授業で体験しようとすると、会場や用具の準備、安全面の配慮などから、莫大な費用と人的配置等が必要となり実現は難しい。それがVR映像によって、容易にクリアできたことは、事業展開の新たな方法を見出すことに繋がったと言える。

7 実践において工夫した点（特色）

○事前の学習で、書籍による理解やオリンピアンと交流を重ね、オリンピック競技の難しさや楽しさ、素晴らしさを感じ取らせた上でVR体験を行った。
○ほとんどの児童がVRの映像を見たことがなかったので、VR映像を視聴する時の健康面や安全面の注意事項について、丁寧に説明した（酔いそうだったらゴーグルを外す、ゴーグルをつけて歩き出さない他）。

8 課題等

○ボランティア団体（ハマヒルガオ Ambassador）のサポートで、VR機材や通信環境を整えていただいた。本校独自では実現が不可能であった。教育効果が高く、様々な教科において汎用性のあるICT機器の一層の環境整備が必要と感じた。
○タブレット端末のVR映像やアプリケーションは、教育現場に一層適応した内容が必要である。

実践事例３　長野原町立北軽井沢小学校（群馬県）

1 実践のテーマ

地域の特色（スケート）をいかしたオリンピック・パラリンピック教育

2 対象者

全校児童　88 名、教員　14 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育
　行事名：スケート校外学習

4 目標（ねらい）

　本事業を活用することで、教育活動全般を通してオリンピック・パラリンピックに関する児童の興味関心の向上を図る。さらに、スポーツを楽しむことを前提として、規範意識の涵養や共生社会、異文化に対する理解の機会として活用し、児童が今後、生涯に渡りスポーツに親しむ素地を育んでいく。

5 取組内容

（1）学校朝礼
　「スケートが滑る理由」（校外授業のプレ授業として）

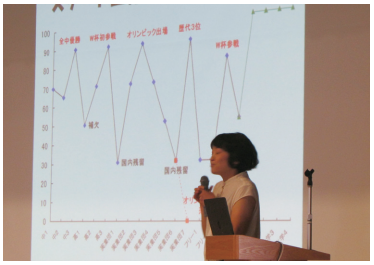
（2）PTA 活動
　リンク管理等（水まき、雪はき作業）における学校と保護者との連携

（3）講演会
　高崎健康福祉大学教授 入澤孝一氏「ふるさと長野原と私のスケート人生」
　高崎健康福祉大学 スケート部員 小原悠里氏
　「オリンピック選手になるために～食習慣とスケート競技」

（4）体育
　12 ～ 1 月の間のスピードスケートの導入

（5）スケート校外学習
　嬬恋高校スケート場での校外学習にて、嬬恋高校出身のオリンピアン（黒岩敏幸氏、黒岩康志氏、宮崎今朝人氏、熊川輝男氏）による児童への直接のスケート実技指導





6 成果

○オリンピック出場を果たした選手や、パラリンピック出場を目指す選手と直接交流することができ、関心や意欲が高まった。
○スポーツのもつ価値や意義は、勝敗に固執することなく得られることを理解した。
○自らの生活への振り返りを通して、共生社会における望ましい態度について理解した。
○冬季の体力作りとして、学校リンクの活用と維持管理について学校と保護者で連携しながら継続できた。
○職員自身のスケートの基本技術に関する指導法の研修になった。

7 実践において工夫した点（特色）

○日常の教育活動への関連づけを図ることで、無理なく、確実に事業の推進を図れた。
○冬季の運動であるスピードスケートに重点を置くなど、地域や学校の特色を活かし、保護者との連携を図った実践ができた。
○地元出身の講師を招聘することで、実践を身近に感じることができた。(入澤氏、黒岩氏、熊川氏、宮崎氏)

8 課題等

○教育課程での関連づけによる一層の充実
　道徳、学活、総合、外国語、体育等との効果的な連携に向けた教育課程の工夫。
○講師招聘にかかわる日程調整
　現役選手の場合には、大会日程等と学教行事日程とのすりあわせに時間がかかった。しかし、健康体育課の担当者に間に入っていただけたので、パラアスリートを招聘することができた。アスリートの年間スケジュールが明確になっていると計画しやすい。

実践事例４　海南市立加茂川小学校（和歌山県）

1 実践のテーマ

セーリング体験

2 対象者

児童　18 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：セーリング体験

4 目標（ねらい）

○オリンピック・パラリンピック教育を実施することにより、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進を図るとともに、スポーツ機運の醸成を図り、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる。
○国からナショナルトレーニングセンターとして指定されている和歌山セーリングセンターの充実した施設・設備を活用し、オリンピック種目であるセーリング競技の魅力に触れる。

5 取組内容

日　時：平成 30 年 10 月 15 日（月）
場　所：和歌山セーリングセンター
内　容
　○はじめに、セーリング競技のナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点である和歌山セーリングセンターの説明を受けた。その後、日本セーリング連盟が作成しているセーリング競技紹介ビデオ（オリンピック種目の１つにセーリング競技があり、競技の魅力やオリンピックを目指す選手たちを紹介するもの）を鑑賞し、施設内に掲示しているオリンピックセーリング競技大会（2012 年ロンドンオリンピック）で撮影された写真の紹介を受けた。





スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

○施設の湾内でヨットに乗り、セーリング体験を実施した。「アクセスディンギー」という初心者でも安全に操船できるヨットを用いての体験であった。オリンピックエンブレムが掲げられている艇庫がすぐそばにあり、オリンピックに関連するナショナルトレーニングセンターであることが良く分かった。



6 成果

○オリンピック種目の一つにセーリングという競技があり、それに関連するナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点という施設が身近にあるということを知ることができた。
○セーリング体験ということで、普段では体験できないスポーツに触れることができ、貴重な体験をすることができた。

【児童の感想文から抜粋】
○貴重な経験ができて良かったです。今回行かせてもらった施設は、オリンピックのマークがあってすごいと思いました。
○今回教えてもらったヨットの乗り方だけでなく、セーリングがオリンピックの種目だということも覚えていくようにしたいと思いました。
○セーリング体験はとても楽しく、オリンピックでも種目になっていることが分かり良かったです。
○今回体験した場所は、オリンピックに関わっている場所であることや、セーリングがオリンピック種目であることが分かりました。
○セーリングがオリンピックの種目の１つだということが分かりました。

7 実践において工夫した点（特色）

○ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点でのセーリング体験ということで、この施設でしか体験できない内容であった。
○普段では触れることのないセーリングを実際に体験することができた。

8 課題等

貴重な体験をすることができたため、セーリングに限らず他のオリンピック種目、パラリンピック種目について学ぶ機会を設け、さらに理解、関心を高めるようにしたい。

実践事例５　福山市立東小学校（広島県）

1 実践のテーマ

学年ごとにテーマを決めた取り組み

2 対象者

全校児童　323 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育、生活
　その他：道徳、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピック教育を通して、児童一人一人が持っている価値観（スポーツの価値、共生社会の実現、多様性の尊重、おもてなしの心など）を広げる。

5 取組内容

（1）第１学年の取り組み
　①世界の文化を体験するために、世界各国のあいさつを学び、友達同士で交流した。（道徳）
　②オリンピック・パラリンピックを教材にして、他国の人々と進んで親しもうとする態度を育成した。（道徳）
　③投の運動遊び跳び箱遊びで「する人」「支える人（アドバイス）」に分かれて学習した。（体育）
　④色や形見つけで秋のフェスティバルを下級生が楽しむための内容や方法を考えた。（生活）

（2）第２学年の取り組み
　①各単元で「する」「見る」「支える」の立場を子ども達と考え、学年・学級集団の中で、運動を経験することと、アドバイス・教え合いをくり返し行った。（体育）
　②写真や映像を使って、器械運動等、トップアスリートの技を知る機会を設けた。（体育）
　③「タヒチからの友達」…言葉が通じなくても、互いの文化や郷土への興味・関心をもとに、遊びやスポーツを通じて交流することの素晴らしさを学んだ。（道徳）

(3) 第３学年の取り組み

①体育実技の見本の映像を鑑賞したり、見学の児童が動きを観察し評価した。（体育）

②レクで新しい球技をつくった。（学活）

③オリンピックの歴史を学んだ。（学活）

(4) 第４学年の取り組み

①マット運動の単元で「東小オリンピック」を開催した。（体育）

②自分にできる技（開脚前転・開脚後転・前転・後転）を３つ選び演技をした。男子の部・女子の部で美しい演技をした３名を表彰した。（体育）

(5) 第５学年の取り組み

①競技について映像を見たりインターネットを使って調べたりした。（総合的な学習の時間）

②みんなが楽しめるスポーツを考え、老人会でプレゼンテーションをした。選ばれたスポーツは後日行われる老人会スポーツ大会の種目として採用された。（総合的な学習の時間）

③地域のスポーツ大会に運営の立場で参加し、支える側を体験した。（総合的な学習の時間）

(6) 第６学年の取り組み

①「真の国際人とは？」ということについて学び、デリゲイツ（外国から来る子ども）との交流に向け、相手の国の文化等について調べた。（総合的な学習の時間）

②交流会では、ミニ運動会、食事会、折り紙などで文化交流をした。（総合的な学習の時間）

③学んだことをまとめ、市内の発表会に参加した。（総合的な学習の時間）

(7) 全校の取り組み

オリンピアンの星奈津美さんの講演を聞いた。「ライバルは自分。１日の終わりに後悔しない過ごし方をすることが大切」ということを学んだ。

6 成果

○オリ・パラに対する関心が高まった。

○いろいろな人の支えによって大会が成り立っていることが分かった。

○自分がどうしたいと考える前に、相手のことを知り、どんなことが喜ばれるのかを考えることが大切だと分かった。

○他国の食文化などを調べることで、日本との共通点・相違点に気付き、他文化を受け入れることが出来た。

○交流では、一緒に体を動かしたり、ジェスチャーを加えながら伝えたりすることで、言葉はあまり通じなくても気持ちが通じ合えることを実感できた子が多くいた。

○得意・苦手に関係なく、みんなで運動を「楽しむ」ことが出来た。

○できないことに対して、自分から「取り組みたい」という意欲を持つことが出来た。
○「来年は○○ができるようになりたい。」という継続的な目標を持つことが出来た。

7 実践において工夫した点（特色）

昨年度までは体育科を中心にオリンピック・パラリンピック教育を進め、スポーツの意義や価値について研究してきたが、今年度は共生社会の実現、多様性の尊重、おもてなしの心などの価値観を児童一人一人が広げたり、深めたりするための取組を行った。

8 課題等

オリンピック・パラリンピック教育のねらいや取組について、教員の理解は深まってきている実感があるが、児童はどのようなことがオリンピック・パラリンピックにつながるのか意識しづらいところがある。

MEMO

実践事例６　岩国市立周北小学校（山口県）

1 実践のテーマ

ふれあい参観日で保護者と地域の方との交流（パラリンピック、ボッチャ体験）

2 対象者

全校児童　７名、教員　６名、保護者および地域住民

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育
　行事名：ふれあい参観日

4 目標（ねらい）

○友達や保護者・地域の人と運動遊びやパラスポーツを一緒に行うことで、運動が好きという児童を増やし、体を動かすことの楽しさを感じることができるようにする。
○地域の人とともにパラリンピック選手の生き方を考える学習を通して、パラリンピックへの興味関心を高める。

5 取組内容

（1）運動遊びの充実（ボッチャを中心に）
　山口県レクリエーション協会を講師に迎え、ボッチャ、ラダーゲッター、スポーツテンカや運動遊びを紹介してもらい、全員で楽しんだ。（9 月 2 回、10 月 1 回　計 3 回実施）





（2）朝の放送時間を活用したパラリンピック競技の紹介（10 月）
　高学年児童が交代で自分が調べたパラリンピック競技について、朝の放送で全校児童に 1 ヶ月間にわたって紹介した。



(3) ふれあい参観日で保護者・地域の人と一緒に行うパラリンピックについての学習（平成 30 年 12 月 1 日）

I'mPOSSIBLE「パラリンピアン香西選手ってどんな人だろう」を教材に、保護者や地域の人とパラリンピックの価値である「勇気」「強い意志」について考え、意見を述べあった。



(4) ふれあい参観日における保護者や地域の人とのボッチャによる交流（平成 30 年 12 月 1 日）

競技やルールについての説明を児童が保護者や地域の人にした後、児童が審判役をしながら一緒に競技を楽しんだ。

6 成果

「パラリンピアン香西選手ってどんな人だろう」に対する児童や保護者、地域の人の感想

○あきらめずに勉強やスポーツをやりたいです。
○自分に何かがなくても、信じればいつかできるようになる。新しい課題をどんどん見つけたい。
○「やりたいことに 100%の力を注ぐ！」という気持ちは本当に大切だと思います。
○腕だけでこんなに素晴らしいスポーツもあるんだと思った。

ふれあい参観日での保護者や地域の人の感想

○子どもと地域の人たちとのよい交流になった。
○親子共々生き生きとして気持ちよかった。
○初めてのボッチャ体験面白かったです。高齢者にも優しい時間をありがとうございます。

7 実践において工夫した点（特色）

○それぞれの活動を連続したものとして位置づけ、イベント的な扱いにならないように配慮した。
○「ふれあい参観日」を活用して、児童だけにとどまらず保護者や地域の人も巻き込んだ活動となるようにした。
○地域の人や保護者とともに活動することを、予め児童に伝えることにより、児童の意欲を高め継続できるようにした。

8 課題等

○ふれあい参観日でのボッチャは、保護者や地域の人に好評であったため、来年度以降も継続して実施する方向で検討したい。
○年齢、体力等に関係なく実施できるボッチャを、地域でのスポーツとして定着できるよう社会体育等との連携を視野に入れたい。

実践事例７　大分県立別府支援学校（大分県）

1 実践のテーマ

ウィルチェアラグビー体験会を通したパラリンピックの理解

2 対象者

高等部　第１～３学年　37 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：特別活動

4 目標（ねらい）

○東京オリンピック・パラリンピックへの関心を高める。
○パラリンピック選手と交流し、経験を通して培った精神を学ぶ。

5 取組内容

（1）事前学習
①各学年においてパソコンや iPad を利用し、オリンピック・パラリンピックについて調べ学習を行う。また、東京で開催されるオリンピックについて知識を得る。
②調べ学習の中で疑問に感じたことを質問にし、当日選手に聞くことができるよう準備する。



（2）競技体験会
①大型テレビを使用したオリパラクイズを行い、生徒の知識を深め、興味関心を高める。
②パラリンピック出場者の講演を、映像を見ながら聞くことで、興味関心を

高める。
③質問タイムで、パラリンピックについての理解を深め、選手として必要な努力や日々の実践を聞く。
④実際に競技を体験することでパラリンピック競技の楽しさを味わい、競技のポイントを聞くことでパラスポーツに親しむ。




(3) 事後学習
①選手にお礼の手紙を書くことで、感じたことや感想を文章化し、学んだことを確認する。
②体育の授業や総合的な学習の時間を使って、校内でウィルチェアラグビーのゲームに取り組み、競技への興味関心を高める。

6 成果

○事前学習をグループ別に行うことにより、興味関心に基づいた探究的な学習を進めることができた。
○選手の体験談を聞くことにより、スポーツの意義や多様性を尊重する姿勢を学ぶことができた。
○実際に選手の迫力のあるタックルを味わうことにより、競技に対する関心を高めることができた。
○選手と交流することで楽しんで競技を行い、競技に対する親しみがわいた。
○選手の日常生活や努力の様子を聞くことで、自己を振り返り、努力の大切さや生活習慣の大切さを学ぶことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○ミニゲーム形式で小グループを作成したため、多くの生徒が体験することができた。
○選手に加え、本校卒業生を招聘することで、パラリンピックを身近なものとして捉えることができた。

8 課題等

継続的、発展的な取り組み

実践事例８　札幌市立東月寒中学校（札幌市）

1 実践のテーマ

「オリ・パラウィーク」を設定した重点的な取り組み

2 対象者

全校生徒　527 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

　オリンピック･パラリンピックの精神である「スポーツを通して心身を向上させ、文化や国籍の違いを越えて友情やフェアプレーを育み、平和でより良い世界をめざす」という理念や価値について理解を深める。また、広い視野に立って目標を設定し、目標の実現に向けた努力が、人生を豊かにすることを自覚できるようにする。

5 取組内容

　10 月 22 日（月）～ 10 月 26 日（金）を「オリ・パラウィーク」に設定

（1）オリンピアンによる講演①（第 1.2 学年対象：10 月 22 日）
　オリンピアンの阿部雅司さん（ノルディック複合）を招聘し、「オリンピック出場とスポーツを通じて養ってきたこと」をテーマに講演会を実施した。講演の中で、阿部さんが 1994 年のリレハンメルオリンピックで獲得した金メダルを生徒に触らせていただき、生徒たちは、今まではテレビでしか見たことがなかった金メダルを直接触れさせていただけることに非常に感動している様子であった。

（2）オリンピアンによる講演②（全校生徒対象：10 月 25 日）
　オリンピアンの吉田圭伸さん（クロスカントリースキー）を招聘し、「オリンピック出場とスポーツを通じて養ってきたこと」をテーマに講演会を実施した。質問コーナーでは、生徒から出た「オリンピックで印象に残っていることは何か？」という質問に対して、「家族に現地に来てもらい、その姿を見せることができたことです」と回答いただき、「自分も一生懸命な姿を見せられるように頑張りたい」という声が生徒からあがった。

(3) 学級対抗陸上競技大会（第３学年対象：10 月 26 日）

日常の体育の学習で習得した技能・体力を発表する場とし、より高いレベルに挑戦する意欲を高めることを目標に、出場種目を決め、学級対抗で陸上競技大会を行なった。スポーツに親しみ、講演会の中で教わった「仲間とともにスポーツができる喜び」「友情やフェアプレーの大切さ」を実感することができた。

(4) オリ・パラコーナーの設置

過去のオリンピックの特集の本や、今回、講演を行なうことができなかったパラリンピックに関する本、また、スポーツ選手を支える職業に関する本を設置し、全校生徒に案内を行なった。









6 成果

オリンピックという、華やかな舞台の裏側にあった挫折や困難の実体験を知ることにより、「勇気をもらうことができた」、「諦めないで挑戦しようと思った」という感想があった。また、「何事にも粘り強く取り組むことの大切さを知った」「やってみないと何も始まらないから、言い訳はやめようと思った」と自分自身の生き方についても考えることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

スポーツの世界だけでなく日常生活にもその精神を活用できるよう指導すること。

8 課題等

パラリンピックについての学習の時間の確保が課題である。

実践事例９　千葉市立誉田東小学校（千葉市）

1 実践のテーマ

パラリンピックスポーツを通した多様性の理解

2 対象者

第６学年　72 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育

4 目標（ねらい）

　パラスポーツの実施により、子供たちが一層スポーツを好きになり、生涯にわたって運動に親しむ資質の向上、東京 2020 大会への関心を高めるとともに、スポーツの多様性について理解を深める。

5 取組内容

	時間	学習のねらい・学習活動
ソフトバレーボール	1	オリエンテーションをして学習の見通しをもつ。
	2	ねらい１　やさしいルールでソフトバレーボールを楽しむ。
	3	＜はじめのルール＞ ３対３　　ネットは１９０ｃｍ　１回キャッチをしてもよい ビニール製のソフトバレーボール５０ｇ
	4	
	5	ねらい２　ルールや作戦を考えてソフトバレーボールを楽しむ。
	6	＜ルールの選択＞ ボールは５０ｇか１００ｇの選択　　キャッチの有無
シッティングバレーボール	1	オリエンテーションをして学習の見通しをもつ。 ○シッティングバレーボールの動画を見る。（I’mPOSSIBLE） ○シッティングバレーボールのルールを知る。 ○準備運動（ストレッチ、ゆりかご） ○座ったままの動き （教師の指示で前後左右に動く、鬼ごっこ、リレー） ○ボール慣れ（２人組で立っている人がボールを投げ、座っている人がパスやアタックで返す、二人組でラリー） ○試しのゲーム（前半４分、後半４分）
シッティングバレーボール	2	ねらい　やさしいルールでシッティングバレーボールを楽しもう。 ○場の準備・準備運動（ストレッチ、ゆりかご） ○座ったままの動き（教師の指示で前後左右に動く、鬼ごっこ） ○ボール慣れ（２人組で立っている人がボールを投げ、座っている人がパスやアタックで返す、二人組でラリー） ○第１ゲーム（前半６分、後半６分） ○第２ゲーム（前半６分、後半６分） ○振り返り
シッティングバレーボール	3	ねらい　やさしいルールでシッティングバレーボールを楽しもう。 ○場の準備・準備運動（ストレッチ、ゆりかご） ○座ったままの動き（教師の指示で前後左右に動く） ○ボール慣れ（２人組で立っている人がボールを投げ、座っている人がパスやアタックで返す、チーム内でラリーゲーム） ○第１ゲーム（前半６分、後半６分） ○第２ゲーム（前半６分、後半６分） ○振り返り、まとめ

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

6 成果

（関心・意欲・態度）

○あまり動かなくてもボールを扱うことができるため、技能の低い児童ほどソフトバレーボールのときよりも意欲の向上が見られた。

○パラスポーツは「障害者の行うスポーツ」という印象から、障害の有無に関わらず「誰もが楽しめるスポーツ」へと見方が大きく変わった。

（思考力・判断力）

○どうしたらボールをつなげることができるのか、チーム内で話し合う姿が見られた。

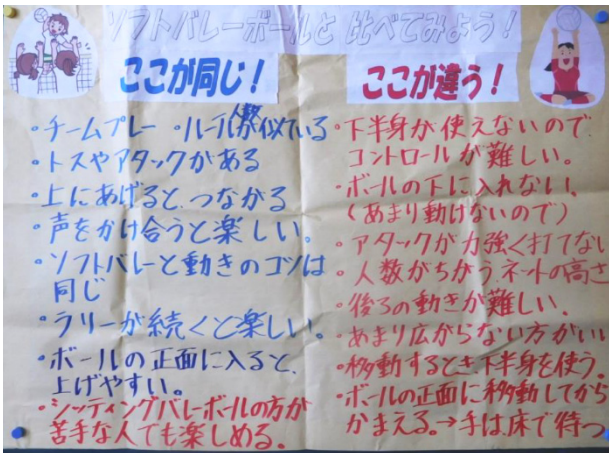
7 実践において工夫した点（特色）

○ラリーを続けやすくするためのルールの工夫

コートの広さを狭くしたり、「キャッチあり」というルールでゲームを行ったことで、ラリーが続き、シッティングバレーボールの楽しさを味わうことができた。

○パラスポーツへの関心を高める振り返り

シッティングバレーボールの前にソフトバレーボールを実施したことを生かし、「ソフトバレーボールとシッティングバレーボールを比べて感じたこと」を振り返った。２つの競技の共通点や相違点を模造紙にまとめていくことで、シッティングバレーボールの特性を深く理解していくことができ、スポーツへの考え方を広めていくことができた。



8 課題等

○２時間目のゲームでは、ボールの重さ（50g、100g）、キャッチの有無をチームによって選ぶことにした。しかし、子どもたちがチームの実態を正しく把握することができずに、難しいルールを選択し、ラリーがあまり続かないチームもあった。児童がルールを選択するのではなく、教師が児童の実態を捉えてルールを提示することが必要である。

○コートを狭くしたことで、体を移動する必要感がなく、体を移動する動きがあまり見られなかった。

○ボールを上に上げる技能がある程度ないとゲームが成立しないため、ソフトバレーボールの後にシッティングバレーボールを行うとよい。

実践事例 10　横浜市立一本松小学校（横浜市）

1 実践のテーマ

特別活動や行事と関連づけたオリンピック・パラリンピック教育

2 対象者

全校児童　296 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：長縄大会、運動会
　その他：特別活動（委員会活動）

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピック競技の関わりを通して、豊かなスポーツライフの実現に向けた基礎を育成し、多様性を認め、持続可能な社会の実現に向けた態度を育成する。

5 取組内容

（1）委員会活動における取り組み
　①運動委員会
　　「一本松スポーツタイム」においてヴォーテックスフットボールを活用してオリンピック競技のやり投げ体験の実施
　②自然動物ふれあい委員会
　　学校周辺のフラワーロード（花壇）にオリンピックカラーの花の植栽
　③集会委員会と情報委員会
　　お昼の放送や○×集会におけるオリ・パラ関連クイズの出題
　④図書委員会
　　図書室内のオリンピック・パラリンピックコーナーの設置や校内のオリンピック・パラリンピック関連の掲示物の作成

（2）行事における取り組み
　①長縄大会の実施（5 月、10 月、2 月）
　　クラス対抗長縄大会を開催し、1 位から 3 位のクラスにはそれぞれ金メダル、銀メダル、銅メダルを授与
　②運動会での聖火リレー
　　運動会の開会式で聖火リレーを実施





6 成果

長縄大会で児童が楽しみながらスポーツに取り組むことができ、体を動かす楽しさや目標を達成できたときの喜びを味わうことができた。また、クイズや掲示物を通して、楽しみながらオリンピック･パラリンピックについて学ぶことができ、オリンピック・パラリンピックへの知識・理解が深まった。

7 実践において工夫した点（特色）

委員会や行事を活用することで、多様な場面･視点でオリンピック･パラリンピック教育に取り組むことができるようにした。また、オリンピック・パラリンピック関連の掲示物を児童が毎日通る昇降口に設置することで、オリンピック・パラリンピック教育に関する活動への意識が高まるようにした。

8 課題等

高学年は様々な場面でオリンピック・パラリンピック教育に関連する活動に参加することができたが、低学年は十分に参加ができなかった。低学年も様々な場面でオリンピック・パラリンピック教育に参加できるように、特別活動の時間をあらかじめ設定するなどの工夫が必要である。

実践事例 11　新潟市立高志中等教育学校（新潟市）

1 実践のテーマ

バスケットボールを通したスポーツの価値の理解

2 対象者

第 1 学年　120 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育、英語
　その他：道徳

4 目標（ねらい）

○オリンピック・パラリンピック開催の機運を生かし、スポーツの意義や価値について関心を高める。
○運動やスポーツへの多様な関わり方（見る・行う・支える・調べる）を通して主体的に関わる生徒を育成する。
○車椅子バスケットボールを通して、インクルーシブな社会（共生社会）について考える。

5 取組内容

（1）事前学習
　①保健体育
　　・体育理論：
　　「運動やスポーツへの多様な関わり方」から、見る・行う・支える・調べるの学習を生かし、オリンピック・パラリンピックについて学習する。
　　・体育：バスケットボールの特性、技術について学習する。
　②英語　NEW CROWN1 LESSON7「SPORTS FOR EVERYONE」
　　障害のある人のスポーツについて学習する。
　③道徳
　　車椅子を制作している人の生き方から学ぶ。

（2）車椅子バスケットボール選手交流会
　①車椅子バスケットボールの歴史、競技人口、競技用車椅子などについて事前に調べ発表し、講師から解説をしてもらった。
　②ゲームの待ち時間を活用し、実行委員が車椅子バスケットボールについて調べた掲示物で学びを深めた。

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成




(3) バスケットボール選手交流会（新潟アルビレックス BB）

①バスケットボールの魅力や技術について、外国人講師へ実行委員生徒が英語でインタビューを行った。

②質問は英語授業で考え、英語で各グループが行い、答えてもらった。

③バスケットボールとオリンピックについて、講師二人からそれぞれの視点で話があり生徒は興味深く聞いていた。



6 成果

実行委員生徒を中心として講師と生徒が一緒に授業を進めていくことで、触れ合う時間も多くあり、活動を通して学びを深めることもできて充実した活動となった。

【生徒感想】

今までパラリンピックについてはあまり知りませんでした。今回の授業で障害のある方でもみんなと一緒に同じスポーツを楽しめること、それによって障害のある方の一つの楽しみとして生きがいに繋がることの素晴らしさが発見できてよかったと思いました。

7 実践において工夫した点（特色）

○実行委員を立ち上げ、生徒が授業を作っていけるように工夫した。内容の検討、準備、当日の進行も生徒が行い、講師と一緒に活動できる時間を確保した。内容の検討は、事前に講師と調整を行っていたためスムーズにできた。

○オリンピックと新潟の関係など実行委員が調べたことを体育館へ掲示し、ワークシートを活用して待っている時間なども有効に学びの時間とすることができた。

8 課題等

車椅子 20 台の運搬は職員 8 人で行い大変苦労した。

実践事例協力校一覧

【小学校】

登米市立北方小学校（宮城県）
郡山市立白岩小学校（福島県）
境町立長田小学校（茨城県）
下妻市立大宝小学校（茨城県）
長野原町立北軽井沢小学校（群馬県）
郡上市立明宝小学校（岐阜県）
伊豆の国市立大仁小学校（静岡県）
清須市立清洲東小学校（愛知県）
篠山市立城東小学校（兵庫県）
海南市立加茂川小学校（和歌山県）
福山市立加茂小学校（広島県）
福山市立東小学校（広島県）
岩国市立周北小学校（山口県）
宿毛市立山奈小学校（高知県）
長崎市立香焼小学校（長崎県）
札幌市立北園小学校（札幌市）
千葉市立誉田東小学校（千葉市）
横浜市立一本松小学校（横浜市）
大阪市立加美東小学校（大阪市）

【中学校】

登別市立幌別中学校（北海道）
佐野市立田沼西中学校（栃木県）
佐倉市立根郷中学校（千葉県）
八百津町立八百津中学校（岐阜県）
沼津市立第二中学校（静岡県）
今治市立北郷中学校（愛媛県）
宿毛市立宿毛中学校（高知県）
札幌市立東月寒中学校（札幌市）
北九州市立曽根中学校（北九州市）

【高等学校】

宮城県南郷高等学校（宮城県）
宮城県利府高等学校（宮城県）
埼玉県立上尾高等学校（埼玉県）
石川県立鶴来高等学校（石川県）
京都府立鴨沂高等学校（京都府）
兵庫県立川西北陵高等学校（兵庫県）
香川県立坂出高等学校（香川県）
熊本県立鹿本高等学校（熊本県）
大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校（大阪市）

【小中連携校】

京都市立東山泉小中学校（京都市）

【小中一貫校】

静岡市立梅ケ島小中学校（静岡市）

【中高一貫校】

新潟市立高志中等教育学校（新潟市）

【特別支援学校】

岩手県立花巻清風支援学校（岩手県）
千葉県立矢切特別支援学校（千葉県）
滋賀県立長浜養護学校（滋賀県）
福岡県立久留米聴覚特別支援学校（福岡県）
大分県立別府支援学校（大分県）

平成 30 年度スポーツ庁委託事業
オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
実践事例集

令和元年 7 月発行

編集・発行
筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
　茨城県つくば市天王台 1-1-1 GSI 棟 204

日本体育大学オリンピック･パラリンピック･ムーブメント全国展開事業（N-COPE）
　東京都世田谷区深沢 7-1-1

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター（ROPE）
　埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学所沢キャンパス 100-427

印刷会社名　マザータンク

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

平成30年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集